

創刊120周年

幼児の教育

2021

夏

— since 1901 —

子ども学の源流を次世代につなぐ

第三号

第三〇巻



光キラキラと揺れて
つかまえようと 伸ばした手

子どもの情景

幼児の教育 夏 2021

第120巻 第3号

写真

子どもの情景 1

目次 まど

今、大切にしたいことを思う 2

特集

創刊120周年記念

『幼児の教育』120年。

未来に何をつなぐのか 2

「おもちゃ」って何？

ー おもちゃをつくる人たちと
考えてみた 4

《座談会 2021》

丸山素直・宮里曉美・私市和子・
花牟禮瑠美子・柳奏子・浜口順子

5

《アーカイブズ》

「平和のための教育」津守 真

ー 『幼児の教育』第87巻第10号

(1988年) から ー 22

実践

私の保育ノート

心躍る時間ー「水」と一緒にー 松田千嘉子

26

保育をつなぐ

ー お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ー
Vol.10

歴史資料からー時を超えてつながるー

吉岡晶子

30

連載

「育ての心」で語りあう

ー 動画を囲んだDX時代のカンファレンス ー
Vol.2

「コミュニティーと心地よさ」(上)

溝口義朗・平賀 努・中村則仁・
野村幸子・久保健太

36

視点

承認不安時代の子育て

山竹伸二

42



目次

表紙の図柄は、1901年に創刊された弊誌第1号の
表紙図柄（荒木十畝・画）をデザイン化したものです。

視点

ブータンの子育てエピソード
タイでの子育てエピソード

太田幸輔

46

文化

鎌倉おもちゃ屋物語 その10

黒須和清

51

探究

子どもの生活世界の現象学的探究
——ユトレヒト学派臨床的教育学の意義に
関する一考察——

浜口順子

62

子ども学のひろば

イベント・メディア情報
読者投稿・編集後記 他

63

■ ■ まど ■ ■ 今、大切にしたいことを思う ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

今号の特集座談会のテーマはおもちゃ。「余白」「100人つくった100通り」といったおもちゃのつくり手の発言内容は、保育で大切にしたいことと重なる。家庭や園でどんなおもちゃを選ぶかは、子どもの育ちに大きな影響を与えるのではないだろうか。そしてコロナと共に暮らす生活の中で、子どもとおもちゃとの関係にはどんな変化が生じたのだろうか。もう30年近く前に、精神科医のなだいなだ氏が保護者向け講話で「与えることは奪うこと」と話されたのを思い出す。次々と多くのものを与えられた子どもは、もっと欲しくなり、ひとつのものを得る喜び、それを大切に扱う経験の機会を奪われるという話だった。

夏号がお手元に届く頃には、どんな生活になっているのだろうか。未知のウィルス発現以降、近未来の見通しを考えることが増えた。しかし同時に、子どもたちの今に、しっかりと目を向けたい。人のかかわりのぎこちなさ、転倒しやすい等が気になるという話も聞かえてくる。コロナ後の生活では今までできなかったことをたくさんできたらとも思うが、丁寧に人やものとの出合いを重ね、かわる喜びを味わえるように、子どもを傍らで、私たちは支えていかれたらとあらためて思う。

（上坂元）

特集

創刊120周年記念

『幼児の教育』120年。 未来に何をつなぐのか 2

1901(明治34)年、『幼児の教育』は『婦人と子ども』という誌名で産声を上げました。

以来120年、本誌は変わりゆく日本の幼児教育・保育を見つめてきました。

この120年の間に、子どもも変わったのでしょうか。

あるいは、子どもは子ども、いつも変わらずにそこにいるのでしょうか。

今年は、「120年の大人と子どもの関係」を本誌の歴史と共に振り返っていきます。

今回のテーマ：

「おもちゃ」って何？

— おもちゃをつくる人たちと 考えてみた

保育とは切り離せない「おもちゃ」。「もてあそぶ(玩ぶ)」に「お」が付いて、いろいろと変化して「おもちゃ」という言葉ができたそうです。おもちゃには、大人の、子どもを喜ばせたい、子どもの笑顔が見たいという気持ちが込められています。でもそれだけでしょうか。その気持ちの奥にあるものは……？ 今回は、いろいろな場でおもちゃをつくっている方たちにその思いを語りあっていたきました。



アーカイブズ

「平和のための教育」 津守 真

— 『幼児の教育』第87巻第10号(1988年)から —

座談会 2021

おもちゃをつくる人たちと 考えてみた

丸山 素直
宮里 曉美
私市 和子
花牟禮瑠実子
柳 奏子
浜口 順子
(発言順)

それぞれのフィールド紹介

丸山 私は東京藝術大学のデザイン科で非常勤講師をしています。主な仕事は、子どもたちをメインとしたワークシヨップづくり。ワークシヨップの考案を学生と一緒にしています。地方の小学校に出向いたり、子ども病院の障害の重い子どもたちがいるところにも出向いたり、時には介護施設や、年配の方たちを対象としたワークシヨップもしています。モノづくり

を通してコミュニケーションをしたり、皆でつくる活動を試行錯誤しながら考案しています。作品を完成させることは一つの目標というか目的でもあるのですが、つくっている途中のコミュニケーションも大切にしているという感じです。

宮里 丸山さんの周りで起こることってワクワクする。大学の授業で学生とつくったかざぐるま、すごく繊細できれいだったんですよ。今日は丸山さんの観点から、どんなお話が聞けるか楽しみにしています。

私市 私は昨年3月までお茶の水女子大学子ども園の施設長をしていました。その前は3歳未満児の同大学内保育所いずみナーサリーで主任をしていました。元々、区立保育所の保育士でしたが、ナーサリーで小さな子どもたちと触れあう中で「子どもにとってのおもちゃ」をあらためて考えてみたいと思い、おもちゃコンサルタント養成講座を受けて、当時お茶大の

丸山素直（東京藝術大学）

私市和子（文京区立お茶の水女子大学こども園 元施設長）

柳 奏子（ピープル株式会社プロモーション戦略部）

宮里曉美（お茶の水女子大学）

花牟禮瑠実子（ピープル株式会社企画開発部）

浜口順子（お茶の水女子大学）

社会人向けプログラムECCCELLでおもちゃ美術館館長の多田千尋さんの講義を聞いたり、ナーサリー主催で多田さんを講師に招いて保育者向けの公開講座を企画したりしました。また、実際におもちゃ美術館で学芸員として来館者におもちゃの紹介をしたり、一緒に遊んで楽しむボランティアに参加したりしていました。地域では親子で楽しむ「おもちゃの広場」を月に1回、1年ぐらい開催していました。

宮里 私市さんはいろいろなものをつなぐ人。子どもとおもちゃをつなぎ、保育者とおもちゃをつなぎ……。こども園では、素材だけども面白なおもちゃをつくっていましたね。

花牟禮 ピープル株式会社の花牟禮と申します。保育園でも目にするような「ぽぽちゃん」や「やりたい放題」をはじめとした、乳幼児対象の知育玩具メーカーです。そこで入社してから約10年、商品企画の仕事をしています。今担当しているのは、構成玩具のシリーズ「ピ

タグラス（以下、P）」で、磁石が入った四角や三角のプレートでお城や怪獣など平面的にも立体的にもつくることが出来るおもちゃです。1歳から小学生までを対象にしたもので、日々お母さんやお子さんの様子を見たり聞いたりしながら商品づくりをしています。

柳 私も花牟禮さんと同じ会社で入社17年ぐらいになります。私は、企画担当が「こんなおもちゃを考えている」というのを受けて、どういう素材を使つてどんなふうにつくっていくのか、「物（もの）化」していく生産管理担当として長く働いていました。ものづくりが好きで、楽しい平和な産業ということでの仕事に就いたわけなんです。それから育休を経て、今はプロモーション戦略担当として、うちのおもちゃを人に知らせる仕事をしています。出版社さんとの取り組みの中で宮里先生とお知り合いになりました。よろしくお願いします。

宮里 柳さんや花牟禮さんたちに出会って、おもちゃが世に出るまでにはさまざまな営みがあり、熱い思いがあることを知りました。それを知ると、おもちゃがよりいとおしく思えてくるんです。今日は、この座談会にお二人が加わってくださることで、新しい気付きや循環が生まれるかも、と期待しています。花牟禮さんたちのPシリーズも、子どもは想定を超える遊び方をしていますので、そのあたりの話を花牟禮さんたちに返さないといけないなと思っています。

おもちゃを開発する大人の心

浜口 おもちゃの開発というお話につながると思いますが、今、机の上にちょうどフレーベルの恩物（ガーベ・No.1～No.6が「積み木」の原型）No.1のうちの1個があるのでお見せしますね（画像1）。教育という目的を意識してつくったおもちゃの最初のものといわれてい

るフレーベルの恩物は、19世紀の前半につくられました。6色の編み毛糸でくるんである、ふかふかと柔らかい、球のおもちゃがNo.1です。フレーベルは、球（ボール）こそが完全なる神に近い形で、それを子どもに最初に触れさせたいと考えました。でも、中に綿の入った柔らかいボールで、それほど正確な球体というわけではないところがみそなんです。No.2の球は木製の堅いもので、感触の違いは歴然です。No.1のボールには毛糸のひもが付いていて、赤ちゃんのそばにいる母親や養育者が、そのひもを持って、ぶらぶらと揺らして赤ちゃんに見せたり赤ちゃんの体に触れさせたりして一緒に遊べるようになっていた。フレーベルの母子関係を慈しむ心が形になっています。そういう意味では、



▲画像1 浜口順子氏とNo.1のボール



▲画像2 私市和子氏と「飛んでキャッチ」

花牟禮さんたちのように開発した人なんですよ。ね。つくり方をお母さんたちに指導したり、No.2以降の木製のものの製造には職人さんの力を借りたりしたのでしよう。同じものを広めようとしています。

お気に入りのおもちゃ

宮里 私市さんのお持ちになったおもちゃはどんなものでしょう。

私市 これは「飛んでキャッチ」というおもちゃです(画像2)。おもちゃは、遊びながら工夫して形が変化したり発展したりするものや、遊びながら想像を膨らませるものが多く、これらは子どもの成長に欠かせないおもちゃだと思います。紹介するおもちゃは単純で、たたくと人形がジャンプする。徐々に目標を

高く上げていきますが、達成したらそこで終わります。でも、ジャンプする人形に「頑張れ」と応援したくなるのです。ね。これがおもちゃ美術館で展示されたときに一番遊んでいたのは大人でした。大人が何度も挑戦して、それを見た子どもが、「やりたい」と遊びだす。たたく力の加減でうまく飛んだり、落ちて何度も挑戦したりと、親子で楽しめます。

宮里 私のは、大分を旅行したときに、こういうレトロなものがたくさんあって。別に高いものではないんだけど一目で気に入ってしまつて買いました(画像3)。扉が開くんです。しかも何か幸せそう。バックさせて手を離すと前に進む。もうすぐ2歳になる孫が、これが好きで、「あ!」と言つてよく遊ぶの。私の家に来るとこれがあ、という感じで、気に



▲画像3 宮里暁美氏とブリキのおもちゃ



▲丸山素直氏

ものです。東京の銀座6丁目の商業ビル、今は「GINZA SIX」になっていますが、その前は松坂屋デパートだったんですね。その松坂屋がいよいよ閉店する

入っているようです。
浜口 ブリキですか？プラスチックですか？
宮里 ブリキです。いいですよ、ブリキの質感に心惹かれます。

駅や街での「つくる」ワークショップ

丸山 宮里先生が初めにちよつと紹介してくださった、かざぐるまの一つの例を。昨年10月、

11月にJR山手線の西日暮里駅で行われたイベントに講師として出て、「花かざぐるま」という、花の形にデザインしたかざぐるまのワークショップをしました。これは7年前の

2013年に私と学生たちが最初に考案した

ときに、何かイベントをしてほしいということ
で開発したのが、花の形をしたかざぐるまなんです。土日の歩行者天国でそのワークショップを開催したら、とても人気が出て、長蛇の列ができました。銀座の街中をそのかざぐるまを持って歩く人でいっぱいになりました。いろいろなワークショップを考案してきましたが、これが一番ロングセラー的に続いています。

西日暮里駅で開催したときの写真をお見せします。この方が西

日暮里駅の駅長さん
(画像4 前列右から二人目)。机の上

にいったいあるのが
かざぐるまの型紙なんです (画像5)。

4月で西日暮里駅が
50周年というイベントで、50という数字



▲画像4 西日暮里駅の皆さん



▲画像5 花かざぐるまの型紙

様の型紙を1枚選んで自分で組み立てます。形は5種類ぐらいあって、なおかつサイズを大中小と用意しました。絵の模様も結構そろえていたので、組み合わせ次第でたくさんさんの個性的なものができていきます。無地の紙も用意しておいて、絵を描きたい人はペンを使って、自分だけの型紙をデザインしました。部品に使用するビーズも、さまざまな色をそろえます。最終的に50という文字のオブジェを花かざぐるままでいっぱいにしました。

のデザインや、山手線、京浜東北線という西日暮里駅を通る電車のイラストや模様のデザインを私がしました。好きな形と模

いつもこういうイベントでは藝大の学生にも講師をしてもらうのですが、この時は「いや、駅員たちが教えるので、いいんですよ」と言われて、駅員さんが、この日はみんなで講師として参加してくださったんです。何よりも駅員さんたちが楽しんでくれて「仕事は大丈夫なんですか」と思うぐらい（笑）、ずーっと駅長さんはそのにいてくださった。つくることに皆が楽しんで参加してくれたという実感がありました。

花牟禮 丸山さんが見せてくださったかざぐるまは、形もデザインをされている？ 型紙があるんですか？

丸山 形からデザインしています。かざぐるまは伝統的な形がありますが、それを基にして、例えばもっと早く回転しやすくなるよう工夫したり、もっと花らしくさせようと花びららしい形にしていたり、枝分かれのように展開していきました。

花牟禮 折り紙でよくつくるベシツクな形だけでなく、こんなにさまざまなかざぐるまのバリエーションがあるんだと驚きです。

宮里 かざぐるまは回るものと思っているけれど、止まっているときもある。50という数字が書かれただけの型紙があんなにおしゃれなかざぐるまになって回るんですね。丸山さんはそれを想定してデザインしているんですか。

丸山 あのワークシヨップに関しては特に、持つて帰ってうれしいもの、完成して遊べるもの、自分でもこんなものできちゃったっていう自信につながるもの、を大事にしています。だから、ある程度のクオリティーは担保できるように型紙のデザインをしておく。でも無地の紙や、さまざまな色のビーズを用意することで、組み合わせ次第で真っ赤なかざぐるまができたり、カラフルなものができたり、100人つくったら100通りのものができる、ということを想像して準備します。

なんとなく気持ち良いおもちゃ

花牟禮 自分の子どもの頃を振り返って思い出したことがあります。印象に残っているのはネフ社の「マグネフ」というおもちゃです。病院の待合室で、子どもが遊ぶように置いてあつて触ったのが最初だと思うんですが、すごくこれ、気持ちの良いおもちゃなんですよね。直径10センチくらいの丸い盤の中に、たくさんの小さな鉄球が縦横に並んで入っていて、磁石が付いたペンを近づけると、下からパチッと鉄球が一つずつ持ち上がって、全体で模様ができたりする。持ち上がった鉄球を指で押すと、ガチャンと下に落ちて、戻ります。一見シンプルですが、本能的にとか感覚的に気持ち良いというところが詰まっています。触っていると、文字がつけられるかなとか、絵を描いてみようかなとか、全部くっ付けてみようかなとか、次々に発想が広がる

んです。とても好きなおもちゃだったなと思
い出しました。

宮里 よくわかります。気持ち良いってすご
く重要なキーワードですよ。

花牟禮 ずっと触っていたくなる「気持ち良
さ」があって、次の「あれやってみようかな」
「これできるかな」に発展していく。根源的な
ところに訴えかける「気持ち良さ」をもって
いないと、次の遊びのステップに行けないと
いうのは、今携わっているおもちゃづくりにも
つながる部分があります。

浜口 ボールはころころ外には転がらないの
ですか？

花牟禮 はい。安全に配慮されているので、
磁石のおもちゃだけれど安心なんですよね。

宮里 やってみたいくなりますね。これは私市
さんも知ってました？

私市 知っていましたが、遊んだことはあり
ません。

宮里 子どもの頃に遊んだおもちゃの記憶が、
花牟禮さんの将来の職業を運命づけたのかし
ら。

花牟禮 何かつながりがあったのかもしれま
せんね。

浜口 私も子どものときに、ボール紙ででき
た、立方体のブロックが12個あって。6面そ
れぞれに違う動物の一部分が描いてあって、
パズルのに組み合わせると一つ動物が出てく
るっていう。6種類の動物に出会えるわけで、
その達成感も面白いのですが、おそらくプラ
スチック製の箱だったら、あんなに引きつけ
られなかったと思うのです。今でも、あの厚
紙の面と面がボカッ、ボカッとぶつかるとき
の音とか、重量感が忘れられません。安っぽ
いけれどボール紙で良かったという感じ。

抽象と具象のバランス

宮里 花牟禮さんたちが開発した丁という構



▲画像6 花牟禮瑠実子氏とJ (ジョイス)

成玩具(画像6)に、白くてとがったパーツがあるんです。そのパーツをいくつも重ねて、それを1枚ずつ外しながら、「これチーズなんだよ」と言った子がいました。とてもうれしそうに。薄く剥がしていく感じがスライスチーズみたいなんでしょうね。このパーツをチーズに見立てると想定していましたか？

花牟禮 チーズ、今初めて聞きました。お子さんの手に渡って初めてわかったということ、すごくありますね。構成玩具の場合、一つのセットの中に、基本となるパーツに加えてさまざまな形のパーツを入れています。バリエー

ションのパーツを考えるとときには、限られた用途や場面でしか使えないものではなくて、想像次第でいろいろな遊び方ができる余白があるように、注意しな

がらつくっています。Pだと、基本は正方形からスタートしているもので、無限大の想像力で何にでもなれるという強みもあるんですけれど、お子さんや一緒に遊ぶ親御さんにとっては、「何をつくったらいいのかしら」というふうに戸惑ってしまう方もいらっしゃると思います。そうなったときの発想のヒントになるようなパーツの中には入れるようにしています。例えば、ドア型のパーツで「じゃあお家をつくってみようか」と遊びに踏み出せるような。なので、抽象と具象のバランスを取りながら、そしてお子さんの手に渡ったときにさらなる発見があるようなおもちゃになるように、というところは結構気をつけていますね。

浜口 抽象と具象のバランスって、おもちゃの面白さを分ける一つのポイントなんでしょうね。Pはかなり抽象度の高いおもちゃとしてスタートしましたが、後になってちよつと具象的なパーツを加える工夫をされていくわ

けですよ。でもあんまり具象的なものが多過ぎて面白くなってしまっているように、そのあたりのブレイキはどうかけるのでしょうか。

花牟禮 ベーシックなアイテムの販売を長年続けていく中で少しずつラインナップが増えてきた経緯ですが、より多くの方に良さを広げたいという商業的な面ももちろんある一方で、利用者の声を反映させているという面もあります。商品の中にアンケートを入れて購入者の方に返却いただくシステムを採用していて、購入した理由や、買って良かった点、改良希望点などをお聞きしています。「もう少したくさんパーツが入ったデラックスのセットが欲しい」「小さい頃に遊んでいたけれど、小学生になって学校の展開図の授業のときにも役立ちました」などというお話を聞くことで、新しい展開や遊びの可能性に気づかされて、シリーズを広げてきた部分もありますね。

小学生とのモノづくり

丸山 さつき花牟禮さんが言われた「余白」という言葉は私も時々使うんですけれども。幾何形体には無限の力があって、具体的な形になればなるほど限定的なものになると思っています。私の場合は、小学校の図工の時間は45分と決まっていたり、2日間にわたる長時間の活動の場合もありますから、クオリティーの高さと自由度をどれくらい大事にしようかな、と環境に合わせた活動を考案しています。でもできるだけ余白を大きくして、子どもたちが伸び伸びとモノづくりができるような環境を用意することを心がけています。

いろいろな地域を訪問してきましたが、例えば福島に近い北茨城市の小学校で、たつぷり2日間かけて子どもたちとモノづくりができる機会がありました。そこにはただ画材と私たちが行くだけ。何をつくらうかと考える



▲画像8 アンコウの形をしたこいのぼり



▲画像7 北茨城市の子どもたちと

ところから始まって、私たち自身も完成できるかわからないけれどつくってみよう、と設計から子どもたちと一緒に考える。先ほどのかざぐるまはお土産品としても、クオリティー面も楽しめるものでしたが、たっぷり2日間やれる場合は、一応モノづくりのプロの大人である私たちが、実際に一緒にそこで試行錯誤することで、子どもがそれに共振する。北茨城市の写真を2枚お見せします(画像7、8)。北茨城市はアンコウが名物なので、アンコ

ウの形をしたこいのぼりをつくったんです。これが全体像で、風で膨らんでいます(画像8)。布を貼り合わせていて。柄は子どもたちが一緒につくりました。後ろにいるのは学生たち。子どもたちがどんなアンコウのデザインにしたいか。苦労や試行錯誤も含めて、その時々壁にぶつかりながら工夫して、一緒に学べる機会と思いました。

乳児さんの遊ぶおもちゃの工夫

私市 こども園で職員がつくった手づくりのおもちゃをいくつか紹介します。梱包材シートでつくった感触遊びのおもちゃです(画像9、10)。小さい子だと手のひらを押し付け、手を動かすとキュキュと音が出ます。1歳半を過ぎる頃になると、指で押して空気が入っ



▲画像9 プチプチ

子どもが見て触れて「これ何だろう」「きれい」と感じるのが大事ですね。色を選んで触れる、外の光が当たるとさらにきれいです。

これは、ペットボトルや排水ホースの穴にものを入れて、動きを見たり、音を感じたりする遊びです（画像11、12）。最初はチェーンリングを落としていたのが、穴の大きさに入るものを自分で見つけて試したりする姿に驚きます。上から入れたものが同じ場所に落ちる、という安心感が子



▲画像10 ガラス戸に張ったシート

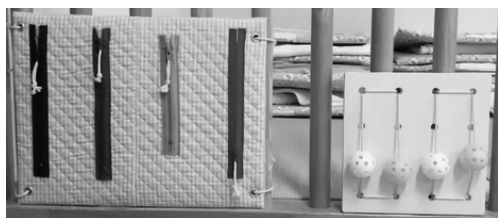
ているものと入っていないものの感触の違いがつく子がいます。同じシートでもガラス戸に張ったシートはデザイン的に美しいです。



▲画像11 ものをに入れる ①

どもたちは好きですが、ボトルやホースが不安定だったり、ゆがんだりしている、片手で押さえて、もう片方の手で入れようとする。小さな子どもたちでも試行錯誤して工夫をして、ものの大きさ、形を理解していくように思います。

ファスナーのおもちゃです（画像13）。ファスナーの色見本のように見えますが、両手に一つずつひもをつまんで上下に動かすのが、子どもには面白いようです。ひもが小さいので、親指と人差し指で持ち、隣の玉（室内用ゴルフボール）の遊びのときは、



▲画像13 ファスナーのおもちゃ



▲画像12 ものをに入れる ②



▲画像14 ままごとの食材

手のひらを使ったり、3本指で握ったりします。素材やものの大きさによって指の使い方が自然に変わります。子どもの遊ぶ姿を見ながら、おもちゃ板の向きを横にしたり、高くしたりする。少しの難易度に夢中になります。

これは、ままごとの食材です（画像14）。右端のお皿の緑の素材は毛糸を結んだものです。ブロッコリーのつもりでつくり、白のチェーリングはご飯に見えますが、何も言わずに容器に入れておいて、イメージは子どもに任せます。ブロッコリー、キュウリとさまざまです。この毛糸を洗濯すると毛羽立ち、小さくな

ってしまいました。

「お豆みたい」と、子どもたちは、ものの変化を楽しんでくれました。2歳児は見立ての遊び、イメージの世界で遊んでいます。

宮里 私市さんが、よく遊んでいる子どもたち

の状態を見て、「多様なものを持ち込んだり組み合わせで遊んでいる」と言われたことがあります。全くそうで、子どもはPで遊んでいても、その周りを積み木で囲むとか。建物ができるばフィギュアが登場する。そのようにして世界をつくっている感じがある。Pは「場的な遊具ですね。積み木の可能性を広げていくとくっつくことで積み木の可能性を広げている。倉橋惣三が恩物を種類別の箱から出している。かごの中に一緒に入れた話は有名です。その時から、積み木は積み木としての意味をもち始めたんですよ。

私市 そうですね。2歳児が積み木で遊ぶと家や電車などの形になって、出来上がりを上下、左右から眺めます。そこで満足して終わることもあります。保育者が動物の人形を「遊びに来ました」と置くだけで、積み木と人形を組み合わせで遊びだします。自分から人形を

次々持ってきて遊びが発展して、物語が始まるのです。「猫が遊びに来たの」「一緒に遊ぼう」と想像を膨らませていきます。

おもちゃが紡ぎ出す物語

宮里 「物語」という言葉が出たのですが、丸山さんが見せてくださったかざぐるまの画像が心に残っています。かざぐるま+50周年+駅。物語が加わったことで、喜びのかざぐるまというか、そこにしかないかざぐるまになった。

丸山 良いおもちゃには物語がつきものという感じがしますよね。

浜口 おもちゃには部分部分をつなげながら物語を紡いでいくブロックやかざぐるまのようなもの、物語の全体がうつすら見えていてそれを操作したり変化を加えたりして面白がるものがあるような気がします。

丸山 私はブロック的な素材を活動ごとにデザインしているという感じです。全体という

のは、例えば北茨城市や西日暮里駅などの、いろいろな環境でしょうか。その環境にあった素材として、かざぐるまでもいいたら型紙やビーズなどをそろえておく。北茨城市の小学校でいうと、白い布と絵の具を用意して自由に過ごす時間を増やす、というふうに、パーツや部品などの素材の量をコントロールしています。

浜口 全体のイメージが先にある感じですか。

丸山 イメージというか、環境や場が用意されているので、その場に合ったやり方考えます。例えば子ども病院には障害をもっている子たちがたくさんいます。力の弱い子たちに対して、何だっただけできるのか、私たちが考える。その都度、商品を開発している感じで大変なんですけれど。ブロック的な素材や部品を学生いつも考案している気がします。

浜口 全体イメージがどう変わっていても自由なんですよ。固定されていない。今日はいくつかざぐるまをつくります、ついで

う完成形があつてその部品を用意しているのとは全然違う。

丸山 違いますね。そもそも、そこでかざぐるまをやつてほしいというオーダーを受けたわけではないんですよ。実際に私がその場に行つて、どういう所で、どういう人が行き交っているかを下見します。通路があつてそこは風が吹くので、かざぐるまはちゃんと回つて物語性があつて良いですよと勧めたら、やつてみたい、ということでした。

浜口 こども園でも「今日は何かをつくらう」と提案して、それらしい部品を用意することがありますよね。

私市 活動によつても違いますが、一斉に座つて行つのでなく、つくりたい子が来て、それを見ている子が「やりたい」と後から入ってきます。保育者は、今は見ているだけでも、そのうち自分からやりだすと思つて見守ることが多いです。私は見ていることも参加している

のと同じだと考えています。

浜口 駅の実践と似ているなと思います。

私市 そうですね。始まりも終わりも自由で素材も選べて、いつもと違う表情の駅員さんがいる。皆さん引き込まれますね。

花牟禮 私市さんがおっしゃった、「見ていることも参加しているのと同じ」という言葉が、すごく印象的です。丸山さんのかざぐるまのお話からは、素材をどのように組み合わせるからスタートしてもよいし、見る参加をしてもよいし、素材からつくる参加をしてもよいし。参加の仕方がいろいろ用意されているという点で、保育と似ているのかなと。

丸山 いつもつくっている人たちがそばにいと、子どももそれに倣う、という面もある。子どもに限らず「私つくるの苦手です」という大人も多いです。「絵を描くのが苦手」とか。でも「これでもいいんだな」というきっかけになればと思っています。例えば、おもちゃがあ

ることがきつかけで、ただの丸が顔になるんだとか。三角が屋根になるんだとか。一緒に遊びながら、見立てる想像力を、大人が子どもに学ぶかもしれない。何かつくっている大人の背中で、子どもがそれをまねするでもよいし。つくりながら、お互いが刺激しあって、何か完成していくのがよいんじゃないかと思います。

宮里 レイチエル・カーソンは『センス・オブ・ワンダー』（1996年 新潮社）で、不思議さや神秘さに目を見張る感性を人はもともともっているけれど、年齢を追うと失われてしまふ、と言っています。大人になると、無邪気に遊んだり、これは一体何だと目を見張ったりするのがちよつと照れ臭くて出せなくなるってことがあるように思います。でもワクワクすること、無条件に面白いと感じられることと出会うと、子どもの頃のような心持ちになつて感動したりできる。丸山さんのワークシヨップの中で、駅員さんたちのあんなに素敵

な笑顔が引き出されたのは、そのあたりに関係しているのかなって。大人にとって今こそ再び、ワクワクすることとの出会いを！ と言いたくなりました。

変わる遊び、変わらないと

花牟禮 最近、赤ちゃんの様子について、面白い話を聞きました。「ガラケー」でボタンを押す形が主流だった頃は、赤ちゃんがそれをまねて押したがるというのが、お母さんたちの「あるある」でしたが、スマホが普及した今は、6か月の子でもスワイプの動作をするらしくて、時代によつても変わつてくるんだなって。

宮里 ボタンは好きですよ。いろんな所にボタンがあつたら楽しそう。

花牟禮 指先をたくさん使う面白さや楽しさも提案し続けたいですね。「ひねる」とか。

柳 私もかつてチャックが付いたおもちゃとかつくりましたね。「ひねる」だと、ペットボ



▲柳 奏子氏

トルの形で上のふたを
カリカリ回して、という
ものをつくったことが
あります。観察している
と、子どもが興味をもち
始めるとそれを見ている
お母さんも「そんなも

のに今興味があるのか」と発見したような目
になる。「一緒にできたね」と見届けることが、
身近な人の喜びだったりもするのでしょね。

振り返ってみると、私も人形やぬいぐるみ
で遊んでいました。子どもの頃、親が働いてい
ておばあちゃん子だったんですけれど、祖母
との思い出も絡んでくるなと思います。お人
形の服や布団をつくってくれたとか。自分も
編み物を教えてもらって、お人形の服を一緒
につくったりとか。そういう周りの人のこと
も一緒にくっついて思い出されます。自分ひ
とりだけのワクワクももちろんあるけれど、

そこにまつわるハッピーな関係性、コミュニ
ケーションもついてくるものなんだなと思っ
ます。

丸山 今日ご紹介したワークショップでは、
一緒にいる大人が駅員さんだったりして、い
ろんなバージョンがあると思いますが、一緒
につくったり、遊んだりした思い出がよみが
えってくるのは美しいというか、素敵だなと
思います。単純なモノではなく、周りの大人や
思い出が絡んでくるので。

浜口 大人がおもちゃについて考えると、自ら
の子ども時代の思い出と重ねたり、いつか思い
出に残るようなおもちゃを子どもに与えたい
と願ったりするんですね。時代を超えるおも
ちゃと一過的なおもちゃがあるのでしょうか。
今日はおもちゃとさまざまな向かい合い方
をされている皆さんとお話しできて貴重な時
間でした。どうもありがとうございます。

(2021年1月31日 Zoomにて開催)

平和のための教育

津守 真

『幼児の教育』第87巻第10号

(1988年) から

先日、ある幼稚園の保育を見学したときのことである。ひとりの男児が、ブロックをつなげてピストルをつくり打ち合いをしていたが、私にその先を向けてきた。私はどのように応答したらよいか一瞬ためらった。

このとき私の心に去来したのは、もうかなり以前から心に留まっていたいくつかのことであった。

ユネスコから出版された「平和の種子」という本の英語版を、私は二年程前に読んだ。この書物はOMEF（世界幼年教育機構）の前世界総裁グタール女史が、世界の約十か国の教育者たちと平和教育に関する委員会をつくり、いろいろの国の実例にもとづいて討論してまとめた書物で、子ども

のときに日常生活の中で平和をつくり上げる体験をすることが、世界平和の基礎であることが主題となっている。子どもたちの間で普通に起こるけんかや葛藤をこの観点からもう一度考えさせてくれる。平和のための教育は子どもを「柔弱にした」り活力を奪ったり無気力にする」ことは違う。「平和のために立ち上がり発言する者は、ときによって大きな精神的勇気を」もたねばならない。このような観点から、葛藤を平和的に処理する体験をするのに大人はどうしたらよいかという、日常保育の中の問いをこの書物は提示している。世界という大きな舞台の上で教育を考えさせてくれる大切な書物である。

その書物の中で武器の玩具について次のように述べられている。「スウェーデン政府は一九七九年の一月八日から戦争玩具の販売を禁じました。一九八二年九月十三日に、欧州議会は、45対82の賛成（12の棄権）で、欧州共同体の国々で、武器で遊ぶことを法的に禁止することを決定しました。その本文は、子どもたちが武器好みになる危険性を強調し、好戦的玩具の製造と販売を次第に減少

させ、建設的な玩具にとってかわるよう勧告しています。」そのすぐあとで、少年たちは精巧な戦車やピストルの玩具を好み、それらが日本製であることが記されている。日本について言及されている唯一の箇所である。

私が青年だった昭和二十年代、武器の玩具については教育界でもジャーナリズムでもしばしば論議されていた。いつのまにかそのような議論は消え、日本は武器の玩具を世界に輸出する国として知られるようになっていく。平和を愛する人間を送り出すのでなく。

そのことをあらためて考えさせられていたとき、私の養護学校で、よそから頂いた玩具の箱の中にピストルと刀があった。養護学校の子どもたちはこういう物にあまり興味をもたないのだが、たまたまそこにいた兄弟が目ざとくみつけて、それを振り回しはじめた。私は自分が校長である学校に武器の玩具をおきたくないと思い、直ちにそれをごみ箱に捨てた。私が決然とそうしたので、そのことが大人たちの論議を呼んだ。ピストルや刀で遊んだからといって戦車を好む人間になるとは

限らない、子どもの中にある攻撃性は子どもの中に解放しておかねばならない、ピストルをもたなければ相手に立ち向かえない弱い子もいる、TVで子どもたちは日常的にみている物だなど……。これらの論議を考えた上でも、私には、それには武器の玩具によるのではなく、もっと別の仕方があるのではないかと思える。武器の玩具を用いないというのは、教育を世界と歴史の視野で考える大人の決意の表明であり、保育者の心意気である。

ブロックでピストルを作り私に向けてきた子どもを前にして、これらのことが私の心を横切った。これは子どもの中から出てきたものののだが、攻撃性にせよ別の関心にせよ、それに対して大人がピストルで応ずるのでなく、もっと違った仕方で受けとめることができないかと考えた。

私は床に散らばっていたブロックの車の輪を組み合わせて、自動車と言ってみせると、その子はすぐにそれに応じて自転車、三輪車などを作った。私はピストルがその子の関心ではなかったこ

とをその場で察した。その男の子はブロックをつなげながら、「ばくのお父さんはラーメン屋さんで、きょうは朝かえってきた」と私に穏やかに話しはじめた。すぐ脇にいた女の子は「うちのわきの道路を通る車の音は同じでも、違う自動車なんだよ」と話す。私はその子の家は自動車の音に悩まされているのかもしれないと推察した。さっきの男の子は「うちには赤ちゃんが生れた」と話を続けた。まわりの子は口々にうちにも赤ちゃんがいるとか、「うちはもう赤ん坊じゃなくて一歳半だけど、きのうばくは指をかまれた」など話がはずんだ。「隣のうちのおじさんのクレーン車は一人のりで小さいんだ」という女の子の話にヒントを得て、私は空箱を重ねて貼り、切り込みを入れてクレーン車を作った。するとさっきのピストルを作っていた男の子がそのクレーン車に更に箱をつみ重ね、セロテープで貼って背の高い車ができていった。私はこの子はいまや赤ん坊の生まれた家族の中で自分自身をつくりあげる過程にあるのだらうと考えた。

この日、ブロックをつなげたピストルを向けて

きた男の子に、私もピストルで応答することもありえたのだが、一瞬立ち止まって、別の発想をしてよかったと思う。

この日は私は保育を見る立場にあった。クラスの全体は担任の先生がしっかりと保育をしているのだから、私は出会った子どもたちをゆつくりと見る事ができるといふ恵まれた立場にあった。また、私が担任をしているクラスの見学者が保育を助けてくれるつもりで見えてくれると、その日の保育が一層充実する。私は自分のまわりの子どもたちをゆつくりと見ることで、そして必要が生じれば交わりを深めることが、保育をしている先生の助けになるのだらうと考えていた。

帰りの支度がはじまったころ、お店やさんの看板の前に数人の女の子が集まり、ひそひそ話していた。看板に「おみせやさ」と書いてあり、「ん」の部分に「★」と記号のような字が記されている。女の子たちは「おみせやさ」まで読みながら、そのあとが「わかんない」と言う。「へんな字」という子もいる。わきにいる女兒がうつむいている。

私はその子たちにいろいろと話しかけたがうまく通じなかった。「ん」の斜線部は正しいのだが、曲線部にこだわるので位置関係がおかしくなるのだろう。困難に出会って細部の解決にこだわる全体像が見えなくなるのは大人も同じである。「おみせやさ」まで読めば「ん」という字を補うのは誰にも自然なことなのに女の子たちはことさらにそこを讀もうとしない。字を書けない子どもが拙いながら払う努力を見ようとしな。このような評価する人間観にこそ問題がある。大人が介入してゆかねばならないのはむしろその点であらう。

養護学校では、自我の形成の途上にある子どもたちが、他人のものをつかんで放さなかったり、そのために押し倒したり、髪を引っ張ったりすることは絶えず起るが、他人を評価したり優越感を持ったりすることはない。その間に入って大人が潤滑油の役を果たせば、子どもたちの活力がダイナミックに働き合う共同の生活が作り出される。能力も性質も異なった子どもたちが、それぞれ自分で遊べるようにし、互いに相違を大切に尊重するように保育するとき、子どもたちの集団は民主

的に働き、それが子どもの社会体験となつてゆくであらう。

ここに述べたのは、一日の保育の中でたまたま私が触れたことにすぎないが、そこにも平和の体験の小さな機会がある。平和のための保育は、イデオロギーの伝達でもなく、知識の伝授でもない。それは日常の保育の中でなされる。

フランス語で書かれたユネスコ出版物『平和の種子』は、最近、OMEPP日本委員会によって、次の題目で日本語で出版された。

『平和の種子を育てよう——幼児期からの国際理解と平和教育』マドレーヌ・グタール著、
 莊司雅子監修、OMEPP日本委員会訳、建帛社

世界の平和のために、親にも教師にも、ひろく一般の人々に読んでほしい書物である。そして、そのつづきを保育の場で実践してゆくことが、世界の平和に貢献する着実な道なのだと思う。

(愛育養護学校)

私の保育ノート

心躍る時間―「水」と一緒に―

松田千嘉子

(保育士)

初めての水遊び

2020年4月、私の保育者としての1年は、新型コロナウイルス感染防止対策による、緊急対応の中で始まりました。家庭保育の協力をしてくださる家庭が多くある一方で、医療などに従事している家庭のため登園する子もいました。クラス全員が登園するようになると、もうすでに園に慣れている子もいれば、今日登園を始めたばかりの子もいる。ちぐはぐな環境のようで、子どもたちの自分のペースを保ちやすい環境だったように思います。

全員が園に慣れ始めた頃に、暑い夏がやって来ました。0歳児どんぐり組では、室内での水遊びが始まりました。水といってもぬるま湯です。最初は警戒して怖がっていた子も徐々に慣れていき、楽しむ様子が見られました。特に水遊びが大好きなFくんは準備を始めるといち早く気づき、入り口の柵につきまわり立ちをして笑顔で顔をのぞかせます。柵の上から目だけ出して、時には背伸びをしながら、「僕の番かな？」とのぞいています。言葉

松田千嘉子（まつだ ちかこ）
文京区立お茶の水女子大学こども園保育士。

は何も発しなくとも表情から期待感が伝わってきました。洗濯機の水の音が聞こえてきても水遊び場をのぞきに行っていて、音からも状況を判断していることに驚かされました。

7月から登園を開始したDくんは、保育者に抱っこされた状態からなかなか動くことができませんでした。家庭ではお風呂の時間を楽しく過ごしているそうで、苦手なわけではないのなら、園でも水の心地よさを感じてほしいと思っていました。ある日、玩具を手渡すと興味を示し、保育者から片手が離れました。試してみるタイミングかもしれないと思い、声をかけながら慎重にシャワーをかけてみました。片腕が保育者から離れなければ、玩具片手にシャワーを浴びることができました。その日以降は、壁の水滴や玩具を使って楽しみながら、短い時間シャワーを浴びました。子どもの小さな変化を受けとめて働きか

けることの大切さを感じました。

その後、戸外でも水遊びをしました。Fくんは戸外で過ごすのが以前から大好きだったので、大好きな場所で大好きな水遊び。全身びしょぬれになりながら楽しんでいました。最初は水を張ったたらいを前にして、玩具で水をすくって、ひっくり返して、と楽しんでたのですが、突然立ち上がり、じょうろを上に掲げて水を出しました。自分の顔がぬれるのもまったく気にせず、手を高く伸ばして、満面の笑顔で水を浴びていました。他クラスの子どもたちが周囲で見ていたのですが、周りなんて気にせず大胆に思いっきり自分のやりたいことを楽しむ姿にたくましさを感じました。室内では絵本を読んだり、歌に合わせ踊ったりという姿が多く見られるFくんの、全く違った一面を見ることができました。気温や風の強さ、子どもの体調などの理由から、

数回しかできませんでしたが、数回でもやってよかったと心から思います。隣にいるだけで弾ける楽しさが伝わってきて、こちらも楽しくなる時間でした。

「10月」の異年齢での水遊び

土曜保育は異年齢で一つの部屋で過ごします。その日は1歳児クラスの子どもから5歳児クラスの子どもまで6人で過ごしました。10月でしたがとても暖かく、園庭でみんなではだしになって遊びました。そこで自然と始まったのが「お風呂作り」でした。4歳児のSちゃんと5歳児のHくんが主導して穴を掘り始めました。4歳児のYちゃんは隣にベッドを作っています。ホテルのイメージだそうです。盛り上がっている頃に、5歳児のAちゃんが登園してきました。みんなの様子を見て「靴置いてくる」と、はだしで遊ぶことを決めました。しかし「お風呂作り」にいきなり

参加するのもためらわれるようで、テラスに座って悩んでいる様子でした。私はAちゃんのタイミングに任せようと思い、その後Aちゃんが誘ってくれたフラフープ遊びなどで一緒に遊びながら、お風呂の様子を見守っていました。いよいよ穴が完成しました。Hくんが水を運ぶのにバケツではなく、たらいを使うといいと提案してくれます。私が「たらいに水を入れると重いよ、持てる？」とHくんと話していると、それまで他の遊びをしていたAちゃんが「いちよう組2人なら持てる！」と元気よくHくんのところへ手伝いに行ったのです。最高学年である、いちよう組としての自信が見えました。言葉通り、2人で何度も運んでいました。お風呂が出来上がると、1歳児のRくんが、勢いよく入っていききました。先に入っていたSちゃんは「顔にかかる！やめて！」と言いながらもRくんの思いつき遊びたい気持ちが伝わったのか、少し距離

をとってRくんの場所を確保していました。その間も、いちよう組の2人は水を運び続けています。出来上がったもので遊ぶ楽しさと、作り上げていく楽しさと、子どもそれぞれに達成感を感じる瞬間が違うようでした。

充実したお風呂遊びと大変な着替え、楽しい食事を終えてから、「10月にやるべき遊びではなかったのではないか？」という思いが自分の中に広がりました。日当たりが良く、とても暖かかったとはいえ、風が吹けば涼しさも感じる季節です。水ではなくお湯を使いましたが、お湯はどんどん冷めていつてしまいます。一方で、異年齢で少人数の時間だからこそ見えた心が動いた瞬間や、何もなかったところから遊びが始まり広がっていく大切な時間であったとも思うのです。

後先考えず一緒に水遊びをした経験は、私の中でとても大切なものになりました。あの

日の天気と登園していた子どもたちと、それを見守っていてくれた他の先生方のおかげで、日常と違った環境の中で子どもたちと心から楽しんで遊ぶという体験ができました。

0歳児のクラスの中での水遊び、異年齢での水遊び。どちらもそれぞれに見えてくる姿が違つてとても興味深いです。水は身近な素材でありながら、遊びに使うと特別な存在になるような気がします。教育実習のときに、砂場に水を入れて、毎日勢いよく飛び込んでいった子どもの笑顔は今でもよく覚えています。緊張していた気持ちをほぐしてくれる、幸せを感じる笑顔でした。あの時抱いた楽しい幸せな気持ちはずっと大切にしていきたいと思っています。そして、身近にあるものに触れる楽しさ、創り出す楽しさをこれからも子どもたちの隣に並んで、一緒に楽しんでいきたいです。

保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.10

歴史資料から
— 時を超えて
つながる —



吉岡晶子



シリーズ「保育をつなぐ」お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信」第10回は、歴史と保育をつなぐ内容です。筆者は本園で長く保育に携わり、退職後に園の歴史資料をひもといてこられました。旧職員の先生方数名で「歴史チーム」として作業を続けてくださっています。

本園には歴史資料に関する問い合わせが折々寄せられます。昨年度は、テレビ番組で「青い目の人形メリーさん」の写真を使いたいという依頼があり、一昨年度は、園長室に置かれていたブロンズ像を、山形天童の美術展に貸し出しました。他にも、論文執筆のための資料の問い合わせがあると、「歴史チーム」の先生方や大学図書館に必ずご相談しています。

吉岡氏が今回、歴史資料の引き出しを開けて、示してくださった様子は、今コロナと共に暮らす生活の中で感じる思いとも重なることがあって驚かされます。読者の皆様も、あらためて感じるが多々あるのではないのでしょうか。

*

吉岡晶子（よしおか あきこ）
元お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。

附属幼稚園を退職後、園にある資料整理のお手伝いをするようになった。本園の明治、大正時代の資料は関東大震災の被害で数少なくなってしまったが、写真・日誌・会議録・研究会資料等が園長室の棚に収められていた。「これは?」「いつから?」など知りたいことがあっても、日々の保育をしている中では歴史をたどったり調べたりすることはなかなかできなかった。この機会に、後世の人が資料を活かせるようにと思い、整理を進めた。

資料には「こんなものがある!」「こんなことが書いてある!」など興味深いものがたくさんあり、園庭の写真を見て「砂場の深さが違う」と見に行ったり、「この木は今どうなっているのだろう」と確認したり、寄り道脱線することもたびたびあった。

その中で印象に残ったのは、日誌に書かれた昭和7年12月の記録。お茶の水の仮園舎から大塚の新園舎への引っ越し^{注2}のことが書き

記されている。57年続いた地から移転する大事業、暮れとお正月を挟んでどのようなされたのだろう、さぞや大変だっただろうと目を通した。一部を抜粋してみる。

移転に関して

昭和七年十一月廿四日より廿五日にかけて庭の主なる樹木を大塚に移す。

廿五日 バラックの最後の写真をうつし置く。

(十二月) 十六日 金 晴

(前略) 本校のがすんでから手があいて居るので、一日も早くとのこと。主事(筆者注…倉橋惣三先生)に電話かけて、二十二日と決める。後又計理から電話で、二十日を十九日にして(筆者注…終業式のことか)、二十一日に移転してはとのこと、交渉したり。それでよいとの由。これにて移転は愈々二十一日と決定。(後略)

十九日 月 晴

幼児はすぐに帰る。

今日をいろいろの催しで各室が計畫して居たのに、急にすぐお帰りと、変更になってしまったので、短い間にお昼の買物やら、自分の荷物つみや、お引越のおはなしやら、お正月のお休みの事、こ

ばれる程の思ひを風呂敷につゝみ込んでうれしうに帰って行く。

幼児が帰ってしまつて、さてその後で相談しながら食事。午後荷造り。多勢のことゝて、夕方迄に大部分出来上る。

二十日 火 晴

(前略) お晝にはピアノ、オルガン等楽器類がまづ第一に大塚へ行った。

神原さん、実習生を十二人つれて大塚へお掃除に。この時会計より車があいたから今日運べるものは運ぶからとのこと。一台送る。書籍戸棚類を。又一台。

かうして次々運ばれると神原さん一人では困るかも知れないからとのこととりあえず新庄がすぐそのまゝ車で大塚へ行く。受け取った荷を夫れ／＼の室に人夫に置いて貰ふ。

暗くなりかけてから二台出たとの知らせ。一台はすぐ来たが一つはなか／＼来ない。新庄は一旦お茶の水に帰る。

荷物のないあき室に、荷を送つてからつい今迄みなさんとお茶をのんでいらつした由。主事は後迄まゐりて下さつた。一寸大塚でのお話をした。たった一人になった神原さんの上を案じて、主事はそれから又大塚へお出かけになった。(後略)

二十一日 水 晴

(前略) いよ／＼お茶の水から大塚へ移轉の日。お天氣がよいのでまづ／＼よかったが、大層寒い日で殊に北からの寒い風で困る。

八時に大塚についた。またトラックは来ないので、ガランとした室に荷を待つ。腰かけもないし、水も出ないし、ストーヴの工合も悪いし。(中略) 次々届く沢山の荷物。よその部に見られぬ面白きものが多いので、人夫など珍らしがりて運ぶ。菓子、みかん、塩せん等にておやつ。

お茶の水より電話にて、とても今日は終らないので、このまゝ帰ること。

金庫、五時ごろ届いたが、職員室迄これから一時間もかゝること。主事一人おのこりにて、一同は帰る。

トラック、十九台。

廿二日 木 晴

今日は少しはあた／＼か。

午前中にトラック四台の荷が到着。

十二時ごろにはお茶の水から皆さんがお出で、これでいよ／＼お茶の水とは完全に別れてしまつた。みんな揃つてこゝで晝食。今日はお茶も十分にのめた。

困つたことに、便所が使用出来なくて、(水が出

ないので、はるか離れた、プールの側まで行かねばならない。寒い風も一通りではないので、このつらさ。

今日で殆んど荷の大体が落ついたので、めい／＼の室や、自分の机などの整理が出来た。

廿三日 金 晴

寒き風。

今日はかたづけものなどにて大したこともなし。そこ、こゝきれいになりたれど、見なれたる、持ちなれたる棚、机等なれど、落つかぬこゝちは致し方もなし。

昭和八年 一月八日 日

日曜なれど、明始業式の準備に集る。

まづ遊戯室の掃除。つゞいて椅子をならべ式の支度。

携帯品室、下駄箱、便所等にそれ／＼の名札を貼りおく。この新園舎に始めて幼児を迎ふるに保育室の準備も出来たれば午後より職員會。

主事室の大きな角テーブルを圍んで初の職員會。諸氏それ、つとめよ、など、いはるゝに、この言葉、この主事より聞くが可笑しとてもな思はず笑ひ出し、然しそれにふさはしく、一寸角ばりたるこなしにて是に應へたり。(後略)

この日の職員写真がある。子どもたちを迎える準備の

仕事は、現在も同じように脈々と続いている。「同じ!」

と昭和8年の映像が浮かんできた。

十八日 水 晴

主事室にめい／＼たんすを置き、夫れ／＼の抽出しに札を貼る。水曜は主事、お茶の水に授業あり、この帰り道にて花鉢を求めらる。咲き盛りなるシクラメン、目もさむるばかりあでやかなり。

引つ越し日が決まったのが1週間前とは結構ぎりぎりのスケジュール。急に終業式の日を変更するとは大変、焼け跡から再生したという藤はこの日にひと足先に来たのか、記録者は文脈からいって新庄先生かしらなどと、会議の記録も書いてあるにもかかわらず、ついこのような部分に目が行ってしまった。同



▲昭和八年一月八日 新園舎保育始めの日(『お茶の水女子大学附属幼稚園創立 140 周年記念誌』P35に掲載)

じように保育に携わっていた自分と重ねてしまうのかもしれない。保育記録のような書き方だからなのか、倉橋先生とのやりとりやいきさつ、その時の様子が目に浮かび、先生方のエネルギー、忙しさやバタバタ感、シクラメンにホッとする気持ちも伝わった。

第壹保育期

四月八日 土

(前略) 庭の趣変りて、今迄のひとところのみ高きをくづして、なだらかな勾配となり、木も植えかえられたり。

櫻の一枝に花二三輪を見る。

十二日

遊具 杵登り、滑り台等備へつけられた。

十四日 金 曇

(前略) 櫟の大きいのが八本ばかり庭にはいつて次々植えられてゆく。目下植樹中 木の根の観察!! と掲示板に主事の字。

(十一月) 二十五日

森、川の組前の花壇を他に移し、こゝをテレスとする計畫、今日より工事に着手。

新年度の記録からは、園庭に遊具が設置され樹が植えられ、造り変えたりして徐々に整備されていることがうかがえる。

「櫟が八本!」確認したくなり園庭に行ってみた。お山に櫟の太きがあるが、数本ある他の櫟は幹の太さがまちまち。当時からの木か、代替わりしている木なのか定かではなかった。

この歴史に残る移転については、『幼児の教育』にも連載で掲載されていた。^{註3} 倉橋先生、新庄先生、旧職員、保育実習科の卒業生、卒園生たちが幼稚園での思い出、当時の園舎のことや園庭のこと、保育の内容や友達のことなどを語っている。中でも旧職員の保育へのかかわり方については興味深かった。

「たより」(第33巻第2号 p 76) には、「移転について、住んでみてからの備へつけの数々、……夫から、夫からと、誠に忙しく、従つて風邪をひくといふ年中行事をしてゐる暇

もなく、一同元氣に過して居ります。」「新園舎に移りましてからはさすがに建物から受ける心境の變化とでも申しませうか、追憶もさる事乍ら、新興幼稚園の意氣大いに旺んで、……」倉橋先生はまめにお掃除に精を出したようで、「折角出来た主事室も席暖かならず……」など、1月8日の職員写真と共に記されている。

90年ほど前の記録から臨場感が伝わってきた。それは私が慣れ親しんだこの園舎園庭を背景にして想像できるからだろうか。

卒園して何年もたった元園児が幼稚園に来ると「変わってない」とよく言う。修理などして変わった所があるにもかかわらず、そう言われるのは、風景や色、匂いや雰囲気からだろうか。子どもたちもその時に味わったものがあるのだろう。保育者もかつてここで過ごした子どもたちも、人や建物や環境、時間もひっくりかえって「幼稚園」でつながって

いるのだろう。

どの園でも、その時その時に保育者は前を見て保育をし、幼稚園を創り、引き継がれてきている。その歴史を知ること、今の保育者を励ましてくれるように思った。

このようにあちこち道草しながらの資料整理はまだ継続中。時空を超えた体験を味わうことができることに感謝しつつ、資料と、今を生きる現場の先生方をつなぐ橋渡しをできたらと思っている。

注

- 1 『日誌三 自昭和七年一月 昭和九年三月まで 附属幼稚園』お茶の水女子大学附属幼稚園蔵
- 2 東京女子高等師範学校移転に伴い、附属幼稚園も文京区湯島から文京区大塚に移った。
- 3 『幼児の教育』第32巻第12号、第33巻第6号

「育ての心」で語りあう

～動画を囲んだDX時代のカンファレンス～

デジタルトランスフォーメーション



「餅を丸める」

▶ Vol.2 コミュニティーと心地よさ(上)



「餅つき3」



「将棋を指す」

この連載では、保育動画を囲んで、保育者、研究者、保護者、子どもに関心のある人、関心のあまりない人、いろんな人が語りあっていきます。

今回のメンバーは5人です。ウッディキッズ（以下、ウッディ）の保育者である溝口義朗さん、平賀努さん（次号「(下)」に登場）。保護者である中村則仁さん、野村幸子さん。そして、研究者である久保健太です。溝口さんは「よっちゃん」とも呼ばれています。中村さんは市議会議員を、野村さんは種苗屋さんをしています。

（構成：久保）



「コミュニティにおける響き合い、感じ合い」

溝口 まずは、三つの動画を見てもらいましょう。「餅を丸める」「餅つき3」「将棋を指す」の動画です（いずれも上掲2次元コードから視聴できます）。それぞれ、餅を丸めている子どもたち、餅をついている子どもたち、将棋を指している子どもたちの動画です。

今日は、一つの活動を深く見るよりも、その活動を取り巻くコミュニティの総体を見たい。「餅を丸める」の動画を見てもらうとわかるのですが、餅つきをやっている子どもたちがいながら、同時に火を焚いている子どもたちがいて、園の中ではお餅を丸める作業をしている。「将棋を指す」の動画の子どもたちは、お餅を丸めている子どもたちの横にいる。園全体の中のコミュニティが実は響きあいながら、感じあいながら、餅をついている。

餅つきを通じて、遊びや伝統を伝えます、

溝口義朗 東京都認証保育所ウッディキッズ。
中村則仁 あきる野市議会議員。
久保健太 関東学院大学教育学部専任講師。

平賀 努 東京都認証保育所ウッディキッズ。
野村幸子 野村植産株式会社。

という保育なら、とても見栄えはいいんだけど、個々の活動が分断されちゃう。

それよりも、将棋の子も、餅つきの子も、園の中でつながりあいながら、個々の活動が行われている。それを大事にしたい。

中村 よっちゃん、餅つきの動画、もう一回見せてもらっていい？

一同 (「餅つき1」を見る)

中村 ここだとシヨウタは後ろに立ってるだけだね。

久保 シヨウタ君って、きねを持つ4人の後ろに立っている子ですか？

溝口 そう。続きも見せますね。

一同 (「餅つき2」を見る)

中村 シヨウタはまだ左手だけでやってるんだ。

一同 (「餅つき3」を見る)

中村 お、シヨウタが入ってきた。

久保 シヨウタ君って中村さんの

ところの子ですか。

中村 ううん(違う)。

久保 すごいね。今、中村さんが、自分の子のようにシヨウタ君を語っているのが。

溝口 そう。ウッディの親は「自分の子どもだけ」じゃないの。

久保 ですね。

中村さんがシヨウタ君をよく知っているっていうのが口ぶりからわかります。



▲「餅つき3」から。シヨウタ君(きねの後ろに顔が見えている子)が入ってきたところ。

うすのちっ　　ちのちっ

野村　うちの3歳の子は、餅つきには入らなかった。参加しなかったんだけど、最近もずっと「餅をつく、餅をつく」って、家で言っているわけ。

溝口　へー、それ面白い。

野村　ソウ君っていうんだけど、「ソウ君やらなかった。お餅つきたい」って言うの。だから、参加してなかったってことも自分の中で覚えていて。

溝口　空間に一緒にいるとき、参加していることも参加していないことも実は一緒に、参加しているのよね。参加していないんだけど。
久保　そうそう。参加してないんだけど、参加している。

野村　「餅をつく」は年末からお正月、ひとしきりずっと言っていた。

久保　動画の餅つきは年末ですか？

溝口　そう、年末。

野村　自分の中で反すうして、思い出したことがあるんじゃないかな。

久保　そうでしょうね。

たぶん来年4歳になった

ら、あの輪のどつかにいるんでしょうね。

野村　ね、いるのかもしれない。

中村　やらなさそう。(笑)

久保　やらないんだ(笑)。そういう子なの？
(笑)

野村　皆がわーっとやっているところに、そんなにいくほうじゃないしね。

久保　今、中村さんが野村さんのお子さんのことを「やらなさそう」って言ったのも、すごいですね。そこまで、ほかの家のお子さんでもわかつちやっているということなんですか？

中村　たぶん。でも僕、割と保護者の中でも



▲野村さんとソウ君

出入りしている時間、多いよね。滞在している時間が長い。タツちゃんか僕が一番じゃないかな？

久保 タツちゃんって？

野村 うちの夫。(笑)

中村 たぶん、いる時間は一番多いほう。昨日もここで横になって、ウッデイの子どもと積み木で遊んだり、邪魔したりしていたから(笑)。ほとんどの子とは、それなりにコミュニケーションを取っています。

溝口 ウッデイは、保護者の滞在時間は長いんじゃないかな。中村さんも野村さんも長いし、ほかの保護者も長いよね。自分の子どもの迎えのときに、よその子どもと遊んでいる姿が多い。

不便を当たり前にする

久保 ウッデイの滞在のしやすさっていうのは何なんですかね。それを知りたくなってきた。

た。僕もウッデイに來ると、いつもゴロゴロしちゃうんですよ。さつきも、僕がゴロゴロしているところを中村さんが見て、「腰、悪いんですか」って(笑)。腰が悪いわけじゃなくて、体が暖まるように、日なた見つけて、そこで寝そべっていたんです(笑)。とはいえ、寝そべるなんて、よっぽどですよ。ウッデイに來ると、スイッチが解除される感じがあらんですよね。

溝口 少し種明かししちゃうとね、毎日連絡帳を書いていてでしょ。その連絡帳に、書いた保育者の名前を、わざと書かないようにしてるの。だけど、毎日繰り返し連絡帳をやりとりしていると、誰が書いたのかわかってくるのよ。これはつとむ君の字だ、これは誰々の字だ、ってね。

野村 わざと名前を書いてないんだろ？とか、わざとホームページがないんだろ？な、ってというのは、保護者からも感じます。不便

を当たり前にして、知らないことを当たり前にして、お互いに聞きながら知っていく。そういうのが面白い。

溝口 そういうことをやっていたら、第三者評価のランキングは下位になっちゃう。(笑)
野村 ただ、私にはすごく面白い。お膳立てしてくれるような園もありますが、そういった園よりも、居心地がいい。

久保 確かに「不便を当たり前に」しておけば、知らないことが当たり前だし、恥ずかしいことじゃないから、「困ったよ」「教えてよ」が気兼ねなく言えますよね。

溝口 居心地の良さって、居心地の悪さと同居しているなとすぐ思っている。園の中も雑然としている。ただ、それは汚れてるっていうよりは、田んぼや畑と同じ雑然さ。畑の中を歩いていると、いろんな植物が雑然と生えていて、そこからセリとかドングリとか見つけるでしょ。ある程度の整頓された雑然さ

っていうのかな。

中村 本当にそう思う。仕事柄、小学校、保育園、幼稚園も見せていただいたりするけど、ぴしつとしているところも多い。ぴしつとしていることは、悪いことじゃない。だけど、家庭と保育園との接続ってことを考えると、ウッデイにあるような、家の暮らしや生活とつながっている雑然さって大事だと思う。どこの家もそんなにきれいいじゃないね。(笑)
ウッデイには、ホームセンターに売っているような家具が置いてあるから、僕からすると、家での暮らしと仕切りがない感じがする。

雑然さと心地よさ

溝口 雑然さって、心地よさのキーワードだと思う。雑然としている限り、動かなきゃいけないんです。遊んだら、散らかるでしょ。それをまた戻したりする作業があつて、それがまた散らかる。

いろんなもの同士を一緒になって元に戻したり、また散らかしたり、戻したりっていう運動をやらなくちゃいけない。

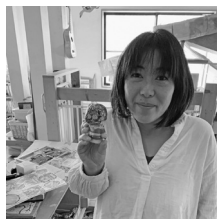
そうすると、きれいな状態も、散らかった状態もあり得るんだけど、いろんな状態、多様な状態があるっていうことが大事で、それが心地よさだと思う。

久保 確かに。この間、子どもを連れてカフェに行ったら、ものすごく疲れたんです。そういうことですね。高級ホテルのような快適さをそのカフェはつくろうとしている。ただ、子どもを連れて入ると、ものすごく疲れる。(笑)

子どもを連れて入るには、ファミレスよりもっと雑然としているくらいの店のほうがいい。わが家が子連れでよく行くのは昔ながらの中華料理屋さんです。近所に、釣りを終えた人たちが来るような中華料理さんがあって、そこでおじさんたち、おばさんたちに混じって食べてるのが一番楽なんですよ(笑)。

カフェよりも、よっぽど快適。そういうことです。

(2021年1月10日 ウッディキッズにて)



▲野村さん



▲(左から)中村さん、溝口さん、平賀さん、久保。

以下、秋号(下)に続きます。

承認不安時代の子育て

山竹伸二

(評論家)

子どもを育てる上で、親は子どもの幸せな未来を思い描きます。子どもがのびのびと育ち、自分のやりたいことを見つけ、自由に生きること。理想や価値を見いだし、納得のいく人生を送ること。しかし実際には、大人になってもやりたいことが見つからず、行動はいつも他人任せで周囲への同調に汲々としている人は少なくありません。

自由とは「やりたいことができる」状態を指す言葉ですが、「やりたいことがわからない」という若い人たちの声を、最近、よく聞くようになりました。好きにしていよいよ、自由にやればいいよ、と言われても、どうしたらいい

のか迷い、戸惑ってしまうらしいのです。その根底にあるのは、好き勝手に行動すれば白い目で見られ、批判されるかもしれない、周囲に認めてもらえない、という強い承認の不安ではないでしょうか。

いまは承認不安の時代です。価値観が急速に変化し、多様化しているため、どうすれば認めてもらえるのかわからない、という不安に満ちています。

特定の価値観が絶対的に信頼されている社会であれば、その価値基準に沿って行動すれば認められるため、承認不安はあまり生じないと思います。その代わり他人と異なる行動

山竹伸二（やまたけ しんじ）

1965年、広島生まれ。大正大学非常勤講師。心理療法、保育、ケアの哲学を研究し、批評活動を展開。著書に『ひとはなぜ「認められたい」のか』他多数。

や生き方は批判されるため、自由はほとんどありません。イスラム教社会や共産主義社会を想像してみればわかるでしょう。自由に生きられる社会とは、多様な価値観に寛容な社会でなければなりません。ところがそのような社会では、認められるための価値基準が曖昧であるため、今度は承認不安が強くなってしまいます。その結果、自由と承認の葛藤が避け難くなるのです。

人間は自由を求める存在ですが、それと同時に、自分の存在に価値があること、すなわち「生きる意味」があることを求めています。その価値を測る基準がなければ、誰かに確認するしかありません。だからこそ身近な人の承認が必要になり、不安にもなるのです。

承認不安が強い人は、したいことがあっても我慢し、承認されるような行為を優先します。認められないことを恐れるあまり、同調圧力に屈して自由を犠牲にし、周囲に振り回

されてしまうのです。そうしているうちに、だんだん自分の感情をごまかすことに慣れ、自分の気持ちに気づくこと（＝自己了解）さえ困難になります。そもそも不安が大きい人間は、不安の対象を避けることばかりに意識が向かい、自分のしたいことを考える余裕もなくなってしまうのです。

この承認不安に対する反応の状態が悪化し、パニックや過呼吸、強迫行為などに転化すれば、心の病として治療が必要になります。そこで、心の治療者は患者に共感すること、患者に「自分の存在が受け入れられている」「認められている」と感じさせ、承認不安を緩和します。それと同時に、患者の言動に焦点を当てて対話し、自分の気持ちに気づかせていくのです。

実は幼児への接し方にも同じことが言えます。親や保育者が幼児の感情を包み込むように受けとめ、共感的に対応していると、子ど

もは「ありのままの自分」が満たされた喜びを感じます。存在そのものが受容され、認められることを私は「存在の承認」と呼んでいますが、愛と信頼の関係にある人から無条件に受容されることは、幼児の中に「存在の承認」の充足、他者への安心感、基本的信頼を生み出します。こうして、過大な承認不安を抱くことなく、安心して自分のしたいことを主体的に行えるようになるのです。

また、幼児は最初、自分の心のざわめきに無自覚で、快不快は感じて、明確に自分の気持ちに気づくことはできません。自己了解する（自己の気持ちに気づく）力がまだないので。しかし、信頼できる養育者や保育者が共感し、その感情を言葉にすることで、次第に自分の感情を自覚し、言葉にできるようになります。「存在の承認」をベースにして、自己了解の力が育まれると言ってもいいでしょう。

このような安心感の中で、幼児は主体的に行動するようになり、自分の「したい」ことを見つけ、いろいろ試すようになります。そして「できる」ことも増えてくる。すると、養育者や保育者はできたことを称賛しますが、これは幼児がした行為の価値を認めたことになるので、「行為の承認」と呼ぶことができます。幼児はできたこと、褒められたことを喜び、もつとしたい、こんなこともしてみたい、と感じるようになり、自分のしたいこと、好きなことを拡げていくのです。

こうして、子どもたちは「存在の承認」と「行為の承認」をベースにして、過度の承認不安に悩まされず、自分の「したい」ことを拡げ、自分の気持ちを自覚できるようになり、自由に生きるための手がかりを得ることになります。

思春期には同調圧力が強くなり、葛藤することもあります。幼児期における承認の体

験が充足されていれば、大抵は切り抜けることができるでしょう。そして自分の「したい」ことを拙げ、自由に生きるための主体性を育んでいけるはずです。

逆に幼児期において「存在の承認」と「行為の承認」が得られなければ、後に大きな課題を残すことになります。身近にいる大人が幼児の喜びや悲しみ、怒りに対してしっかりと向き合わず、共感的に対応することができなければ、そして幼児の「したい」ことを理解し、尊重することができなければ、幼児は「存在の承認」を感じられないため、自分の存在価値に対して信頼ができず、自己否定的になるでしょう。そして、自分の存在価値を確かめるために、「行為の承認」に執着します。自分の「したい」ことを抑圧し、親の期待や要求に応じた「しなければならぬ」ことで頭が一杯になるからです。

このような子どもは親の言う通りに頑張り

続けた結果、「いい子」や優等生にはなれるかもしれませんが、強い自己不全感を抱えるようになる場合が少なくありません。自分が本当に「したい」こともわからなくなり、周囲の目を過剰に気にするようになってしまうのです。

自分の「したい」ことを大事にして、自由に生きること。自分の存在や行為が認められ、自己の存在価値、生きる意味を感じられること。この二つが可能になるか否かは、幼児期における大人の接し方次第で大きく変わってきます。承認不安の時代だからこそ、より一層、このことを胸に刻んで子どもたちと向き合う必要があるのです。

ブータンの保育園事情と タイでの子育てエピソード

太田幸輔

(教育活動家)

大学を卒業してからさまざまな国に教育分野でかかわってきましたが、その中でも特にかかわりの強かった国であるブータンの保育園事情、そして長男を出産したタイにまつわるエピソードの一端をご紹介します。

ブータンの保育園事情

私がブータンに初めて降り立ったのは2009年。ブータンの地方公立校で体育教師を2年間務めました。その頃は王制から民主主義を基本とする立憲君主制になったばかりという変革期でしたが、海外からさまざまなものが入ってくるわけではなく、こと教育においても外資

系の学校の進出等もほとんどありませんでした。そんなブータンは、実は義務教育という概念がないため、入学時の年齢が異なります。当時、私が教えていた一番下のクラスにも、4歳で入学した子もいれば、10歳で入学してきた子もいました。自給自足で生きているブータン人も多くいたので、学校に入学させない家庭もあれば下の子の世話をさせてから学校に入れる家庭もあるなど、まだまだ緩やかな時代でした。

再訪した2017～19年。全人口の10%以上の人々が首都ティンブーに集まるという首都集中が起きていました。その理由は「地方に職がない」ということでした。失業率も10%を

太田幸輔（おおた こうすけ）

大学を卒業後、教師としてブータンやタイに滞在。帰国後は子育てに専念するため主夫期間を設けた。現在、島根県津和野町の教育を魅力あるものにすべく活動中。

上回る社会現象となり、それはコロナ禍の今でも変わっていないことです。また、民主化以降インターネットが解禁となった時代を過ごした子どもたちが成人となり、自給自足や農業従事ではなく、華やかな仕事や外への憧れを抱くようになっていくことも背景のひとつです。物価は高騰しているにもかかわらず上がらない賃金のため、両親が共働きしないと生きていけない世帯が増えました。そのため、ティンブー市内において保育園の需要が高まり、保育園が乱立している状態でした(元々ブータンに「保育園」という概念はなく、高所得層向けのプレスクールが存在する程度でした)。

そのような状態なので、保育士免許をもっている人もほとんどおらず、子どもたちを預かってはいるものの、ほとんどの時間を室内で過ごしたり、一日中テレビを観せたりしているだけの園もあるそうです。一方で、保育内容が充実した私立保育園もありますが、高い学費の問題などで高所得者やブータンで働いている外国人

家族の子どもたちが通う場となっています。

現在でも、各省庁内に職員の子ども用保育園が創設されるなど保育園の需要は高まる一方だそうです。しかしながらブータンの平均月収の4分の1程度が保育料という園が多く、家計を圧迫する要因にもなっています。ただ、実際に私が訪問した園では、園長自らが近隣のインドで勉強をして戻り、自園の先生たちに教授しながら、園での生活を展開していました。そのようにして保育の質を高めていくという機運も見られています。これからのブータンにおける幼児の保育・福祉のあり方について国としてどう対応していくのか、これからも見守っていきたいと思います。

タイでの子育て生活

タイに住んでいた2014～17年。政権転覆を狙ったクーデターが起こり、さらにはプミポン前国王の崩御という激動の時代の中、2016年に私たちは待望の第一子を授かりました。

当時、首都のバンコクから車で約3時間離れたシラチャという町に住んでいた私と妻は、現地人が住むコンドミニアムに入居したことでたくさんタイ人の友人ができました。その中でも、家族と呼べるほどの付き合いをしているノイさん一家との出会いに恵まりました。

妻が妊娠しているときのことです。ある日、ノイさんがわが家を訪れました。大きな袋を部屋の中にどんどん入れているので中身は何だろうとのぞいてみると、その中には大量のココナッツが入っていました。不思議に思いノイさんに聞いてみると、「妊婦がココナッツを飲むと、透き通ったきれいな肌の赤ちゃんが生まれてくるんだよ」と言われました。タイならではの話だなあと思いつつ、その日から妻はココナッツを日々飲むようにしました。割るのは私の役目で、気がつけば職人のようにココナッツを割れるようになり、日本にいては身に付かない技術を習得することができたのも良い思い出です。

そうした日々を過ごして、ついに出産。本当

にわが子の肌が透き通るような白さで驚きました。余談ですが、タイ人は妊婦健診の際必ずといっていいほど父親も同伴していました。日本で第二子、第三子を出産した際、連れ立っている父親の数の少なさに啞然としたことも明記しておきます。

このようにして、初めての子育ての地がタイとなった私たちですが、タイ人の、小さい子どもに対しての優しさも忘れることができません。首都バンコクで買い物をするのに電車を利用したときのことです。私たちが車内に入ると同時に、座っている人が一人二人と席を立って、座席に向かって指を指し始めました。これは「ここに座っていいよ」という合図なのです。妊娠中もそうでしたが、小さな子どもを連れている家族に対して非常に愛情深く接してくれます。座れば隣の人が「ジャッエ」（タイ版のいないないばあ）とあやし始めてくれるので、わが子はたくさんの方々と接する機会をもつことができました。また、ご飯を食べにお店に行くと、

毎度のように「抱っこしてもいいですか?」と店員さんが尋ねてきます。そして「その間にご飯食べちゃってね!」と言い残して厨房まで連れて行ってしまう……とてもありがたい時間をつくってくれるのです。付け加えて彼、彼女らのすごいところは、子どもが泣いても全く動じないことです。泣くことは当たり前、といった感覚なので、泣いてもすぐに我々の元に戻ってきません。むしろ、こちらが気になってしまい、様子を前に厨房の中まで行くぐらいでした。

そのような生活が続けてわかったことは、タイでは若者でも子どもの抱っこの仕方、あやし方がとても上手ということでした。これは、日頃からタイ人は家族を大切に、きょうだいや子どもの世話をしていることが要因なのだと思います。日本に帰国して以来、お店に入って「抱っこしてもいいですか?」と言われたことはほぼなく、むしろかわりを避けられることのほうが多い印象です。これは国民性なのかもしれませんが、子どものための居場所づく

りや何かを与えたりすることよりも、生活する中でのかわり方を変えることで、子どもたちにたくさんのお会いやきつかけ、コミュニケーションを与えることができるのではないかと強く感じます。

現在私は、男子3人という子宝に恵まれ、義務教育だけに頼らない「0歳児からのひとつづき」学校だけではなく「町全体を学びの場」にするべく、教育魅力化コーディネーターとして

島根県津和野町で活動しています。妊婦さんや乳児連れの保護者さん、将来親となる高校生をはじめとした若者を巻き込んだ学びプロジェクトを進めている最中です。ご関心をもたれた方は、ぜひご連絡いただけたら幸いです。



<https://www.facebook.com/kosuke.ata/>

店に来てほしいのはおもちゃを楽しめる大人。その代表が通称「キントトさん」。女優の岸恵子似の上品なおばさまですが実は筋金入りのおもちゃ好き。面白いおもちゃを求めて各地を飛び回り、おもちゃ好きの集まりに参加してはその戦果を「きんとうん」というおまけ付きミニコミ誌をつくって載せているというガチな発信系おもちゃマニアです。月1ぐらいでやって来て、今日も開口一番



ほら、私の最新おもちゃ関係情報もすでに知っている。私が行くおもちゃ問屋なんか全部行っているし、私が大発見！これぞ！と思って仕入れてきたおもちゃもとっくに持っていたりする。「面白い」が基準の目利きは確かで、面白ければどんどん買ってくれるありがたいお客様！ なのですが……。

オーナーが仕入れていたこんなおもちゃ、上のピー玉が道無き道をジグザグに転がってきちんと下のお皿に入るという不思議なもの。私はこれが好きで、でもちょっとお高くて。だからこの店に来るたびに店員特権で遊んでいたのですが、当然キントトさんがこれを見逃すわけがない。オーナーもあっさり売っちゃうんだものなあ！ 残念！



逆に目利きのキントトさん、面白くないものは見向きもしません。これが怖い！キントトさんが来る日が決まったら、脳みそ全開で商品作りと仕入れに走る私、ミシュランの調査員を迎える食堂のオヤジです。そろえた物がお気に召せば、すぐ喜んでくれて、たくさん買ってくれて、ミニコミ誌「きんとうん」に載せて褒めてくれて、まさに三つ星扱いになるのでそろりや頑張りますよ！そんなミシュランがお帰りになったら、もうその日は終わり。

お客相手もしない、ただのふめけのイウトビペンギン。

でもこういう方こそが、おもちゃ絶滅を阻止してくれている心強い味方なのですね。世の大人が親が、みんなキントトさんならいいのになあ！



鎌倉おもちゃ屋物語

くろすかずきよ

その10

面白駄玩具の紹介と
新米おもちゃ屋の
とたばたエッセイ！



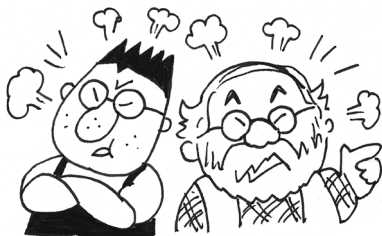
鎌倉の有名な駄玩具屋「くろぬま」が閉店しました。
私の少年時代の駄玩具屋によく似た
「戦争で焼け残った昭和の家」のたたずまいで
観光客にも人気のスポットだったのに。

くろぬまは子ども相手、うちは大人相手、ポリシーは違うけど近所のご同業、これからライバルとして、しのぎを削る戦いのドラマが始まるはずだったのに……残念です。店主のおじいさんが亡くなったとか。娘さんらしきお姉さんが手伝っていたのに後は継いでくれなかったんですね。こういうおもちゃ屋を継ぐのはやはり無謀なんでしょうか。その後うちに子どものお客が増えたような……でも、ヒゲだるまオーナーはこう言います。

そう！ 私も同感。なのに、おもちゃは
子どものためだけのものだと思っている親が
ホントたくさんいるんですよ。



そんな親はおもちゃ屋に来るとまず子どもを解き放つ、
自分たちは外でタバコ吸ってたりする。おもちゃ屋を子どもの遊び場だと思っ
ているんですね。そんな親の子どもたちはもうやりたい放題、片っ端から次々
おもちゃを触りこちらの説明などろくに聞かず無茶苦茶します。遊んだものは
元に戻さず、違う所に置きまくる。するとすぐに親が声かけます。「もう行くよ！」
子どもはまだまだ遊びたいのでぐずったりする。揚げ句に「今日は何にも買わ
ないって言ったでしょ！」と無理やり引っ張っていく。これ一番悪いのは誰？
子どもじゃない、親ですよ親！ なんで一緒におもちゃを楽しまないんだろう。
遊び方を教えてやらないんだろう。子どもを楽しませたくて入ってきたのなら
なんで子どもが飽きるまで居てやらないんだろう。おもちゃをじっくり楽しむ
遊び方を親が手本となって見せないから、
子どもはおもちゃの扱いがわからず次々
いじって無茶苦茶するんですよ。
おもちゃ屋を滅ぼすのはこういう親、
大人のせいなんです。台風一過の店の中、
いつもは温厚なオーナーと二人でそんな
バカ親をののしりあう日もたびたびです。



黒須和清 1955年東京生まれ。横浜在住。
洗足こども短期大学教授として手作りおもちゃや人形劇
を教えるかたわら、ペーパークラフトや執筆活動、研修
会講師の仕事などで忙しい。

文献

1. Langeveld, M.J. (1983) *The Stillness of the Secret Place, Phenomenology + Pedagogy, 1*, No.1, CA: University of Alberta.
2. フェルメール, E.A.A. (1986) 浜口順子訳 子どもの遊び (7) 幼児の教育85-11 フレーベル館 pp.30-38
3. Langeveld, M.J. (1955) *Bevrijding door beeldcommunicatie, Ned. Tschr. v. d. Psychologie*. NL.
4. フッサール, E. (1974) 細谷恒夫・木田元訳 ヨーロッパ諸学の危機と超越的現象学 中央公論社
5. Beekman, T., Mulderij, K. (1974) *Beleving en ervaring*, NL: Boom Meppel.
6. Manen, M van (1978-1979) , *An Experiment in Educational Theorizing: The Utrecht School, Interchange*, 10-1 , NL.
7. Schenk, F.B. (1980) *De Utrechtse School* , NL: Utrecht University (Unpublished)
8. Spiegelberg, H. (1978) *The Phenomenological Movement*, 2, NL: Martinus Nijhoff.
9. Vermeer, E.A.A. (1955) *Spel en spelpedagogische problemen*, NL: Bijveld.
10. 津守真 (1995) 私に現象学的教育学を教えてくれた人：エディット・フェルメール 幼児の教育96-2 フレーベル館 pp.30-34
11. Lubbers, R. (1966) *Voortgang en nieuw begin in de opvoeding*, NL: Van Gorcum.
12. Langeveld, M.J. (1969) *The Columbus*, NL: Karger.
13. Langeveld, M.J. (1979) *Beknopte theoretische pedagogiek*, NL: Wolters-Noordhoff.
14. 和田修二 (1982) 子どもの人間学 第一法規出版
15. Imelman, J.D. (red.) (1983) *Filosofie van opvoeding en onderwijs*, NL: Wolters-Noordhoff.
16. Langeveld, M.J. (1966) *Elk kind is eer één*, NL: Intro.
17. ランゲフェルト, M.J. (1974) 岡田渥美・和田修二訳 教育と人間の省察 玉川大学出版部
18. Lubbers, R. (1985) *Opvoeden tussen gisteren en morgen*, NL: Dekker & van de Vegt.

*opvoeding*は動詞 *opvoeden* の派生形であり、『①食物を与えること、②特に道德的、精神的、社会的形成に適応しつつ、支援し (*onderhouden*) 育成させる (*grootbrengen*) こと、③道德的または精神的発達』(Van Daleオランダ語辞典) という意味をもつ。つまり子どもが心身共に社会適応的な存在へと発達していくのを(大人が)助ける行為をさす。日本語でこの概念を一言で言い当てるのは意外に難しい。養育、育児、保育、子育て等考えられるがそれぞれ独特のニュアンスがあり、*opvoeding*のもつ生物学的、精神的、道德的、社会的局面のうちどれかが不足してしまうようだ。

ところで日本語の「教育」は、上から知識や技術を授けるという教授(注入)の意味合いが濃く、中でも学校における知育を中心に使われることが多い。したがって家庭教育、道德教育などの複合語で*opvoeding*的内容の一面について語ろうとする場合でも、子どもを単なる受動的な存在に仕立てて、どう教えたらいいのかという一方通行的な技術論に陥りやすい。

知識や技術を伝達し覚えさせると側面はたしかに「教育」にあるが、オランダ語ではこれを*onderwijs*といい、日常生活の中で厳密に*opvoeding*とは区別して使われている。因みに英語のeducationは日本語の「教育」と同様に、主に*onderwijs*の意味で使われており、ランゲフェルトは*opvoeding*概念が「教育」論の盲点になり易いことを指摘している。

臨床的教育学の「臨床性」—子どもひとりひとりを尊重しながら発達上の問題に援助の手を差しのべ、子どもの自由を見守りつつ大人は価値を呈示し、子どもはその価値を判断し実現していく—は*opvoeding*の本質に一致している。第2次大戦後に着手されたユトレヒト大学における「臨床的教育学」の研究は、この意味でまさしく「*opvoeding*についての学問」に向かってまっすぐ方向を見定めていた。それは従来の教育学への警鐘としての意味も大きかったといえるだろう。我が国の教育学研究の将来にとって、教育の臨床性(*opvoeding*としての教育)という視点は、教育概念を再構成する上で一つのヒントになるに違いない。

(注1) 本文中のイタリック体の単語はオランダ語表記である。

(注2) *personalism*は普通「人格主義」と訳されるが、ここでは文字通り、人間(子ども)ひとりひとりをpersonとして尊重する態度として用い、適当な訳語が見つからないので英語のままとした。

* この論文は日蘭学会誌第11巻第1号(1986年10月、pp1-16)所収の「子どもの生活世界と教育学 — ユトレヒト学派臨床的教育学の意義に関する一考察 —」を一部修正して再掲したものである。

子どもの環境や文化的社会的状況に即して臨床的援助を行うことは、教育上必要であるという以上に、教育的行為そのものである。

《子どもを理解すること》

子どもひとりひとりを独自の人格として受け容れることは、同時にその子どもを理解しようとする努力と切り離すことができない。子どもを理解するには、ある問題の原因を究明しそれを除去しようとする単なる治療的姿勢とは異なる、全人格的な関わりが要請される。

ルネが手を使えなく（使おうとしなく）なった直接的原因を追究しても、それだけでは彼が再び能動的に生きようとするための援助にはならなかっただろう。ルネ少年の生きている実存の状況を共に生きようとし全人格的に理解しようとしながら、活路がルネ自身によって開けていったのである。教育者としての大人はここで常識や理論などの先入見的な知識から一時自分を解放し、目の前の切実な具体的な状況の中に生きてみて、子どもの生活世界から真に主体的な理解を試みなくてはならない。そしてそのためには、「真摯な自己批判」と「積極果敢な自己更新」とが大人側の必須条件として求められている¹⁷。

IV. 用語的問題 ―結びにかえて―

臨床的教育学があくまでも教育学的見地を基礎に子どもを見つめようとしており、医学的な意味での治療（矯正）をめざしているのではないことを論じた。それではなぜ臨床的（klinisch）、治療（therapie）などの医学用語を使用するのかという問題がある。これについては臨床的教育学研究者たちの間で共通の問題意識になっているが、「教育学的な意味で」という条件つきでほとんど慣用されているのが現状である。その中でランゲフェルトはいくつかの用語に関する提言を行っている。たとえばtherapieのかわりにギリシャ語のanagogieという語を使うことを提案している¹⁸。これは「行きつ戻りつしながらどこかへ人を導く」という語源的意味をもつ。教育者としての大人と子どもとが共にありながら、一方的な権威を上から押し付けるのではなく、子どもの自由をも尊重しながらある方向へすすんでいこうとする「臨床的」過程を示しているといえよう。

次に教育学という用語だが、オランダ語のpedagogiek（教育学）はVan Daleオランダ語辞典によれば“leer van de opvoeding, opvoedkunde”つまり opvoeding, opvoedkundeについての学問とある。一方、日本語で教育学というと「教育学についての学問」であるのは一目瞭然である。ところでここで注意しなければならないのは、日本語の「教育」は慣用的には必ずしも opvoeding を意味せず、むしろオランダ語の onderwijis に近いということだ。

再び他人の安全を保障する人間になるための前提条件なのであった。こうしてルネはLとの共同的な活動を続ける中で、自分の身体に関する経験を築き直し、正常化させていった。学校の教師や同級生との関係も徐々に回復をみた。後年ルネは精密な手仕事を要する眼鏡の技師となり、ハープ奏者の女性と結婚した。ルネはLにこう言った。「でも、私が好きなのは手だけではないのです。私は彼女を、彼女自身を愛しているのです。」¹⁶

《子どもひとりひとり》

臨床的教育学において子どもと援助者としての大人は、クライアントーセラピストという二項対立の関係を越えて、相互が自らの全人格を投入して作りあげる教育的状況の中で、課題を共有し、理解し、克服していこうとする。子どもの抱えている問題は「治す」べき異常な部分なのではない。問題を担った子どもとしての実存様式が十全なる意味を体現している、とみなすところから始まるのだ。したがって臨床的教育学は、子どもに問題行動があるかないかにかかわらず、一般的に教育者としての立場にある大人（親、先生を問わず）がひとりひとりの子どもをその人として尊重し理解していくために貢献すべき研究領域なのである。

《援助する教育》

臨床医学とは基礎医学と対照的に、実地に（床に伏している；clinicos）患者を診断・治療していくための医学の一領域である。医師は患者の具体的な困難に対して、専門性を生かしてその特定の患者に最も適当と思われる処置をほどこし、患者が再び自立的に生きられるようにする。

2人の人間がいるとそこには、両者の関係を介するファクターとして、政治的關係、労使関係、血縁関係など様々なものが単一的でなく複雑に組み合わさって見出される。医師－病人に代表される臨床的關係もその一つであり、知識や経験、技術などを介して一方が他方に個別的な援助を与えるという、ある基本的な人間関係を象徴している。その意味で、ランゲフェルトの周辺で展開されはじめた臨床的教育学は、教育という複合的な人間関係の中でも特に、大人が子どもの発達を援助するという、より基本的な局面に光を当てたものと考えることができる。しかし医学と教育とを同列化して語るには限界があり、教育の「臨床性」の意味に増幅が起こるのは避けられない。それがつまり、価値と人格の交わりに関する問題である。

心身の病気や不具合を治療するという意味あいでは「臨床」を捉えたと、臨床教育は、子どもひとりひとりから離れ、遅れや異常性、不適応性などの視点からそれらを是正することを目的としたものへ向かうだろう。しかし、ランゲフェルトらの臨床教育学においては、正常とか適応的などの概念がそもそもどのような価値基準に則っているかが問題となる。こうした問いをもつことが教育における臨床的關係において基本となる。クライアントである子どもひとりひとりの世界を理解し、ひいては

ず、子ども性を尊重した援助的教育なのである。

Ⅲ．「臨床的」教育学 ―援助する教育―

(1) ランゲフェルト教育学の展開

ランゲフェルトの教育学理論は継承される過程で、一方においてその理論枠組の体系化に重点をおく理論的教育学 (*theoretische pedagogiek*) と、他方において子どもの具体的な状況の記述を基礎に実践と理論化の統合をめざす臨床的教育学 (*klinische pedagogiek*) との2つの流れに分岐するようになった。J.D.イーメルマンImelmanとJ.リスペンズRispensはランゲフェルトの現象学者としての二面性を指摘し、教育現象の本質構造に関心を寄せる客観的、古典的現象学者である一方、子どもの生活世界から子どもを理解しようとする主観的な「理解する」現象学者でもあるという¹⁵。そしてこの後者の面こそランゲフェルト教育学の特徴を躍如たらしめ、前者とのバランスを保ちながら理論の硬直化を防ぎ得ていた。ランゲフェルトという人物の中には理論的教育学者と臨床的教育学者とが矛盾なく一体化していたということにもなる。

彼の理論的教育学の流れは主にドイツ語圏と北米に広がり、各々特色ある発展を見ているのに対して、臨床的教育学の波及はユトレヒト大学とその影響の強いライデン大学の臨床・特殊教育学科等、オランダ国内にとどまっている。

(2) 教育学と「臨床性」

ある子どものケースを紹介する。これはランゲフェルトが会った多くの子どもたちの中でも特に悲劇的な一例といえるが、この話を契機に「臨床性」の特徴について考えていきたい。

第二次大戦中少年ルネ（当時10歳）はインドネシアの日本軍強制収容所で、見張り人の貯えていた食料を病気の自分のために盗んでくれた父親が、見つかってその罰として自分の目の前で両手を切り落とされるのを見なければならなかった。父を亡くしたルネは一人オランダに帰国した。母親は「事件」について父親の友人から伝え聞いたが、ルネの口からは一切その話題は出なかった。ほとんど口をきかず、身体からは生気が抜けたかのごとくであり、「手」は必要の時以外一切使おうとしなかった。ルネが13歳の時ランゲフェルト（L.）は母親に、なるべく手でする仕事をルネに手伝わせるように助言した。一方ルネは半年程かけてやっと少しずつ心が打ち解けるようになった。L.はよくルネをボート漕ぎに誘って出かけた。オールをルネの手に握らせ、その上からL.がその手を包んだ。『コロンブス・テスト』の絵について思ったことを語り合ったり、時には暴力場面と解釈される絵についても話ができるようになった。L.はルネに受動的に庇護されている感じを与えることが必要だと母親に伝えた。それがルネ自身、能動的に

は子ども（人間）という存在を「教育されなければならない動物」animal-educandumとして捉えた¹³。

《personalism》^{注2}

ランゲフェルトの研究は、教育の本質的構造を論じる硬質な面と、JanやCathleenなど名前のあるpersonとしての子どもが登場し記述される軟質な面とをもち、この両面がそれぞれ縦糸と横糸のように織り合わされると、ランゲフェルト教育学の全体的な図柄が浮かび上がるような構造になっている。

「子どもの個性を尊重する教育」とは今や、使い古された言い回しであるので、わかりきったことのように考えがちだが、その内実は意外と教育現場（家庭、学校など）に反映されにくい。個性を尊重するとは実際どういうことなのか — これをランゲフェルトはその軟質な研究面から独特の切り口であざやかに描き出し、論理を超越した方法で読む人の感性に印象づける。

フィリップ・アリエスがかつて『〈子供〉の誕生』で、西欧社会は近代になってはじめて、大人とは違う存在としての保護・教育されるべき「子ども」を発見したと言ったが、ランゲフェルトは教育学の中にはじめてpersonとして（individualではなく）の子どもを発見したといえるかもしれない。（ランゲフェルトのpersonalismには、彼が師事したPh. コーンスタムKohnstammの影響が大きいと言われる。）個々人それぞれの個性があることを単に傍観者的にみとめるのにはとどまらず、子どもひとりひとりの個性を十全なるものとして尊重しつつ、その子どもの発達する状況に当事者として参加し援助していこうとする。つまり理論それ自体の中に、理論を現実には照らして省察するように促す構造が組み込まれている。そこに教育学者としての責任性が問われ続けることになるともいえるのである。

《教育における価値》

教育には大人から子どもへ、生活様式や道徳などの「価値」を伝える側面がある。理想的人間像や世界観などは決して教育学特有のテーマではないが、教育的状況の中では、大人がそれを子どもに適当かどうかを取捨選択することを避けられない点に教育的特徴がある¹⁴。しかしこの前提条件として、人間の個別性をみとめ、子どもの側にも価値を判断し自分のものとして実現する自由を承認することが求められている。この態度は「大人性」が成熟することによって到達されているはずの価値観なのである。

したがってランゲフェルトの教育学には、あるべき「大人らしさ（大人性）」というのが教育の根本的価値として貫かれており、つまりそのような大人になっていくプロセスに教育の使命が介在しているとみることができ、規範性を帯びた教育観があることは明らかである。そしてその教育とはもとより注入的な教育ではあり得

が援助していく関係を、精神分析学派やロジャーズ学派等の心理療法と同様「遊戯療法」と名付けてランゲフェルトらも開発したが、その理論的基礎にある教育学的コンテクストはやはり独自のものであるといわなければならない。R.ルバース Lubbersもボイテンデイクの下で学び、遊戯療法研究を行ったが、彼は特にイメージコミュニケーションによる援助的教育の理論化に力を注いだ¹¹。またランゲフェルト他、フェルメール、ルバースをはじめとする若手研究者が治療的遊びの一手法として考案した『コロブス・テスト』も一種の投影的テストとして広く普及し、英語圏にも知られる同研究所の重要な成果の一つとして特筆される¹²。

《批判》

50年代のアメリカのスキナーらによる行動主義心理学が欧米はじめ世界的な席卷をみせ、ユトレヒト学派の研究は「主観的」、「非科学的」という批判を受けた。また60年代後半には、ランゲフェルト等ユトレヒト学派の重鎮的教授たちはスチューデントパワーの非難材料にもなった。ボイテンデイクやランゲフェルトなどは学識の広さと人間の洞察の深さにおいて傑出していたとはいえ、古典的権威的なタイプの学者であったことは否めない。その中の1人であったファン・デン・ベルクは「議論のレベルが高すぎて学生から遊離していた部分もある」と冷静に回想している⁷。1972年ランゲフェルトが退官して以来、研究所内の研究傾向の分化は著しい。

II. ランゲフェルトの教育理論の特徴

《animal-educandum》

「教育」における重要なファクターである「子ども」は従来抽象的な人間（大人）像の陰にかくれたり、生物・生理学的レベルから幼体として語られたりしてきた。これに対しランゲフェルトは子ども－大人の関係性を介した、子どもの本質的な存在様式を解明しようとする。したがってその裏側には「大人」の存在様式への問いも同時に含まれている。

動物的本能に乏しい人間は自分を庇護、援助してくれる存在を絶対的に必要とする（無力でよるべない）状態で生まれてくる。一方大人になれば、自分のことは自分であることができるし、さらには他人をも助けられるだけの知識や技能をもち、他人との共同性の下に自己の責任をとることでもある。そしてこれらのことを基本的に支えているのは、他者と共存しようとする意志、および他者・社会を信頼することのできる精神的姿勢である。つまり大人であることとは、「責任性 responsibility」、「有能性 competence」、「信頼性 reliability」の3点に集約される。このような大人とよるべない存在として生まれてくる子どもとの関係性の下に、彼

心理学者であり、『女性』、『人間と動物』（共に邦訳あり）等数多くの著作、論文を残した。フローニンゲン大学教授を経て1946年より11年間ユトレヒト大学心理学研究所所長を務めた。現象学的方法を基礎とした心理学的人間学を構築しようとしていたとみられ⁸、直接的に教育学に関する論文を残さなかったものの、たとえば「子どもの微笑」『人間の行動・運動の一般理論』などは子どもの行動理解に重要な示唆を与え、『人間と動物の遊び』は後述する教育学研究所の遊戯観察への直接的な契機となった。人間の行動を生物学・生理学的に観察する方法と、その行動の起こる具体的な状況から行動の意味を開示していく手法はボイテンディクの研究に一貫している。ランゲフェルトの教育学は、このボイテンディクの人間学的視点に大きく影響されている。

《教育学研究所の研究》

ランゲフェルトは1946年ユトレヒト大学に正教授として赴任し、その後四半世紀間はオランダの代表的な教育学者となる。研究所は彼の強い指導力の下、教育の基本的な事実から出発した実践性の高い教育学理論の構築をめざして多くの共同研究者たちと共に歩みはじめた。1947年フェルメールの発案で研究所内にプレイルームを設け、心の問題を抱えた子どもの治療的遊戯実習が始められた。学生に、直接子どもと共に遊び、子どもの行動を見守り援助する実践的体験をさせることがその目的の一つだった。このような指導プログラムは教育学徒の指導法として先駆的な意義もあった。この参加実習と並行して観察も行われた。観察室から一方視窓(one-way screen)を通してプレイルームで遊ぶ子どもに気付かれないように観察する方法は今ではよく知られているが、当時はランゲフェルトの発案でのぞき窓に斜めに板を打ちつけ、その隙間から観察していたという。いくら観察者側の部屋を暗くしても、その窓を不審がった子どもが暗がりの中の観察者を見つけてしまうという失敗談もあったようだ。

遊戯観察はそれ以前からユトレヒト大学付属病院の精神科で行われていたというが、医学的な見地からは、遊戯は子どもの異常を発見するための診断上の手段として利用されていた。これに対し、教育学研究所では遊び自体の意味、遊びを創造する状況と子どもの精神発達との関係、そして遊びを通して子どもの十全な発達を可能にするために大人はどのような援助ができるのか、など遊びの教育学的可能性を追究することを基本的な問題意識にしていた。フェルメールはこの点において理論的考察を深め、1955年『遊びと遊び教育学的問題』で博士号を取得した⁹。その理論は主にオランダ、ドイツに広がりを見せ、日本の津守真はフェルメールを通して現象学的保育研究の道を拓いた¹⁰。

遊びを通して子どもが自らの内面的な葛藤を克服していけるように大人（治療者）

の薄い抽象的な概念を羅列することによって、生きた実践に関わるべき教育学が机上の絵空事になってしまうことに対する警告をここに見ることができる。

『教育 (opvoeding) とは何かという問題は、ざっくりばらんな日常のありふれた経験 (huis-, tuin- en keukenervaring 家や庭や台所での経験) に基礎づけられた概念によって語られる必要がある』⁵とランゲフェルトは言う。この「秘密の場所」のような考察は、手近にある自分の子ども時代の経験をもとに、各自が教育的現象を血の通った問題として考えはじめるための手がかりとなるだろう。それは一般的に教育という人間の営みに関わっている人々にとっては無論そうであるし、教育学という学問領域においても重大な意義をもつ問題提起だった。

I. ユトレヒト学派と教育学

《ユトレヒト大学教育学研究所》

1950年代になりユトレヒト大学心理学科を中心に人間行動を現象学的に記述する研究が集中的に発表され、「ユトレヒト学派」と称される研究運動が形成された⁶。当時アメリカ実証主義の影響で、自然的世界の観察と同じく人間の行動も経験的公共的にみとめられる事実のみを客観的価値のあるものとし、主観的体験や推量などは一切排除する方法が浸透してきた。ユトレヒト学派の問題意識は常にこの「人間不在の」精神科学への危機感に根ざしていた。思想的にはフランス実存主義の波の只中にあり、学派の招待でユトレヒト大学においてサルトルが講義を行ったこともある⁷。心理学、精神医学、生物学、教育学、哲学等の専門研究者が、人間性の精神科学への回復、定着、発展をめざして著作を共同執筆し、さらには国際的（独、仏、北米など）な連携を広げていった点で、ユトレヒト学派を一つの運動として位置づけることができよう。当時ユトレヒト大学にはまだ教育学科がなく、後に教育学の分野で活躍するようになった研究者の多くは心理学の学位を取得していた。ランゲフェルトは1946年に教育学研究所 (Het Pedagogische Instituut) を創設するが、その後増設された臨床的教育学実習センターと共に「教育学科」として心理学から独立するのは1963年だった。ユトレヒト学派の主なメンバーとしてはランゲフェルトの他に、犯罪・産業心理学研究所（1949年）所長のD.J.ファン・レネップVan Lennep、N.ベーツBeets、J.リンスホーテンLinshoten、E.A.A.フェルメールVermeer（1908-1996）、N.F.ファン・デル・ゼイデVan der Zeyde、B.J.カウヴェルKouwer、J.H.デイクハイスDijkhuisなど、また精神医学の方面ではH.C.リュムケRümke、J.H.ファン・デン・ベルクVan den Bergの名を挙げることができる。しかし学派の中で最も影響力をもっていた中心的人物とはF.J.J.ボイテンデイクBuytendijk（1887-1974）である。彼は国際的にも著名な医学・生物学・

れてしまうが、だからこそ「安全な」隠れ場所の体験。オランダの教育学者ランゲフェルト M.J. Langeveld (1905-1989) は、この「秘密の場所」の人間発達の意味を現象学的に解明する。

ランゲフェルトによるとこの体験は、自己という「内」の世界と外的世界とを認識上分化させながら人格 (personality) を形成していく、人間の精神発達のプロセスと深く関係している。子どもは発達初期には、まわりの世界と自己とを未分化な、馴れ親しんだ一体として体験しているが、3 歳頃になると、自己と周囲の世界とを対立する二者として知覚するようになる。自分以外の人たちと共有している外的世界はすでに歴史的社会的な意味を帯びているので、子どもはそれに対してしばしば軋轢を体験せざるを得ない。たとえば空想にふけりながら宇宙ロケットの操縦士よろしく、テレビのスイッチを手当たり次第にいじくりまわせば、母親に制止されるのは必至である。テレビの受像機がもつ公共的な意味を前にして、子どもは自分の私的な意味付与 (ロケット操縦台のようなテレビ) が対立していることを思い知らされるだろう²。

ランゲフェルトはこれら二種類の対立的な意味付与を、共同の意味付与 (*gratuite zingeving*^{註1}) と私的意味付与 (*personale zingeving*) と名付けて区別したが、子どもがこの両者間の相克を通して新たに意味付与を敢行し、共同の現実の主体的に対処できるようになっていくことが発達上の課題となる³。この観点に立つと、「秘密の場所」とは子どもにとって、外的世界と内なる世界との融合地点として実存的な形式と感覚性とが与えられている空間であるということが出来る。不可解な大人たちの世界からの避難所として、子どもはカーテンの裏に片時身を置いて、再び飛び立つための心の糧にしているとも考えられよう。したがって「お仕置」などで特別な場所に一人置いてきぼりにされる場合とは状況の意味を全く異にしている。「秘密の場所」は子ども自らの選択の下で体験されない限り、安全かつ平和なものではない。そしてそこは子どもが自己としての人格を形成していく場であり続ける。したがってその場所を大人が見守ってやり、少なくとも無闇に禁止したりなどしないのが教育学的に大切であるとランゲフェルトは言う。

以上の「秘密の場所」をめぐる考察は、子どもの日常的なありふれた世界を看過せず、むしろその軽視されやすい「あたり前」の事象に意味を見出そうとする態度から生まれた。フッサールの後期現象学は『「無記名」のままにとどまっている主観的現象の領域』⁴としての生活世界を解明することこそ哲学を普遍学たらしめるに必須の使命であるとしているが、子どもという存在、ひいては教育という現象について常識や先入観 (固定的な理論も含めて) で見えなくなっている生活世界のレベルから記述する方法がランゲフェルト教育学の一大特徴となっている。リアリティ

子どもの生活世界の現象学的探究 — ユトレヒト学派臨床的教育学の意義に関する一考察 —

浜口 順子*

Phenomenological Research in The Child's Life-world
— An Approach to the Meaning of Clinical Pedagogy in the Utrecht School —

Junko HAMAGUCHI

The research through phenomenological description of human behavior was mainly developed at Utrecht University in the Netherlands during the 1950's and ever since, this group of researchers has been called the "Utrecht School".

M.J.Langeveld, one of the group's most influential members, worked on an unique theorization, which pursues the meaning of education through the child's life world. His theory has also been succeeded and developed by his co-researchers as "clinical pedagogy". Clinical pedagogy is a particular field of educational research, where one can find practical insight into the substance of "care and education (opvoeding, in Dutch)", and is raising questions among contemporary pedagogists and practitioners.

序 子どもの生活世界への招待

『厚いカーテンのうしろ側 — そこにはなんと深い静けさがあることだろう。たとえ部屋の中が物音や人声でどんなに騒がしくなっていようと……。子どもはカーテンの陰でじっと息をひそめている。(中略) もともとはカーテンのこちら側で生活していたその子どもも、今やカーテンの向こう側を自分の隠れ場所、安らぎの避難所にしようとしているのだ。その秘密の王国に踏み込んでしまえば、それまでの世界は彼方へと遠ざかる。カーテンは彼の聖域をつくりだす。』¹

子どもの身体を包み込んでしまうような厚いカーテンに馴染みのない日本式家屋も多いだろうが、これを読んだときに、その異文化性よりはむしろ、自分もかつて共通の感覚を味わったことがあることに思いあたるだろう。カーテンのうしろ側でなくても、押入れの中や洋服ダンスの奥深く、あるいはテーブルの下かもしれない。子どもはそこで平和なる「孤独」にひたっている。一步そこから踏み出したり、あるいは母親に用事を言いつけられたりすれば忽ち共同的な現実の世界に引きもどさ

* (はまぐち じゅんこ) お茶の水女子大学

子ども学の

ひろば

お便り

POST

◆私の「カルチャー・いんふお」◆

本と映画をご紹介します。

歌人、河野裕子は2010年に64歳で亡くなるまで多くの歌集や随筆を発表しています。「お母さんあなたはわたしのお母さん、裕ちゃんごはんだよと呼ぶこゑがする」。自分の母のことを詠みながら、命の終わりが見えている母としての自身のことも思ったのでしょうか。病院での緩和ケアではなく自宅での介護を選び退院し、主治医と看護師が「昔」のように自宅に訪問してくれることを喜びます。同じく歌人である夫 永田和宏、息子、娘がそばにいて、書けなくなった最後は口述筆記をしました。「手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が」と死の前日にも作歌し、「われは忘れず」と言い残し息をひきとりました。『家族の歌』（2011年 産経新聞出版）は歌人である家族全員が順番に書いた連載をまとめた作品です。歌集『葦舟』（2009年 角川学芸出版）で私の故郷、兵庫県小野市の詩歌文学賞を受賞しています。

映画『痛くない死に方』（2021年 高橋伴明監督）では、同名の原作の著者 長尾和宏医師の自宅での看取りについての考えをはっきり描いています。河野裕子と同じく、自宅で介護を受ける本多彰は、柄本佑扮する医師 河田仁の訪問診療を受けます。河田は Living Will を書くことにより患者の望む最期を尊重すると話し、家で看取る家族のために最期の時が近づいた兆候をあらかじめ説明します。点滴で輸液を入れ過ぎると「溺れてしまい」、枯れる結果の死を「穏やかな死」と呼んで。「痛みなく悔いなき最期平穏死」は高橋監督が終末川柳と名付け、患者の本多彰に映画の中で詠ませた作品です。本多は河田医師と共に縁側で花火を見ながら大好きなお酒の杯を傾けます。「死に水も人目盗んで酒にして」。(AK)

◇研究論文を募集します◇ ピアレビュー(査読)の上、掲載します。

- 【テーマ】 子ども、保育、幼児教育に関するもの。
 - 【文字数等】 400字詰め原稿用紙 35枚程度（写真・図表、文献、注を含む）。本文はワードで作成。
 - 【締め切り】 随時募集します。投稿予定の方は本誌編集委員会まで。
- Mail:youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

お茶の水女子大学社会人講座(文科省BP認定) 「保育・子育て支援ラーニングプログラム」 2021年度 後学期(10月開講) 受講生募集

夜間や週末開講のお茶大 ECCELL 社会人プログラムが 2021年度後学期の募集を行います。お茶大こども園と大学・大学院が連携し、保育実践者や一般社会人を対象とした学びの場を、オンラインにより開講します。*男性も受講可能です。



Brush up Program
for professional

- 【開講科目】(2021年10月～2022年1月)
 - ・「保育人間学演習」(2単位、大学院科目、木曜 18:20～19:50) 担当: 浜口順子
 - ・「保育マネジメント論演習」(2単位、大学院科目、金曜 18:20～19:50) 担当: 宮里曉美
 - 【出願期間】 2021(令和3)年7月15～22日
 - 【Eメール】 nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp
- 詳しくは大学 HP をご覧ください。

このほか、公開講座型の「乳幼児の世界Ⅰ」や「からだ・表現ワークショップ」の開講も予定されています。9月以降、上記アドレスまでメールでお問い合わせください。

編集後記

この号が手元に届く頃の私へ。東京オリンピックの準備は進んでいますか？ 新型コロナのワクチン接種は効果を生んでいますか。地震や豪雨の被害が、また出てしまっていないでしょうか。

東日本大震災から10年。この間にマンモス級の予期せぬ災害が起る頻度が高くなってきたような気がする。1年ほど前から、新型コロナウイルスと闘うために世界中で生活様式が変化した。南米でもアラブ諸国でも、皆一様にマスクをしている。アニメではない。毎日そんなニュース映像が流れ、世界は一つだということ、世界は小さいということ、人間は皆同じ人類なのだということを思い知らされる。ユニクロの柳井社長が朝日新聞のインタビューで、

コロナ禍は通常なら10年かかる社会的変化を一気にもたらしたと語っていた。私も今、大学でオンラインの授業をするため、e-ラーニングシステムにふり落とされないように頑張っている。そして、逆に、オンライン授業の良い面にも気づき、対面式授業を当然だと考えてきたこれまでの大学の在り方を相対的に捉えられるようになってきた。

「はかない」という言葉の語源は、計ることのできる目安や物事の進み具合（はか）がないということらしい。生活のベースが大きく変わり、先が見えにくく、「はかなさ」を覚える。だからこそ、今生きている当たり前を見つめ直すこともできる。そんな発想法に恵まれるときなのかもしれない。(HJ)

次号予告 幼児の教育 秋号 2021年10月刊行予定

創刊120周年。歴史を生かし「今」の保育をどうするか。

- ◇ 『幼児の教育』120周年。未来に何をつなぐのか 3
座談会 子どものくらしと行事 ―“まつり”に着目して
加藤 理氏・西野博之氏・松延 毅氏 ほか
- ◇ 伝承文化について すとうあさえ氏（絵本作家）
- ◇ 高等学校家庭科授業風景から 片岡知子氏（都立高校教諭）

※タイトル内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 夏号 第120巻 第3号

令和3年7月1日発行
編集発行人／浜口順子
編集担当／田中恭子
発行所／お茶の水女子大学
『幼児の教育』編集委員会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学
浜口順子研究室内
youi-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

発売所／株式会社フレーベル館
電話：03-5395-6604（編集）
振替／00190-2-19640
印刷所／図書印刷株式会社
定価／本体880円＋税
◎お茶の水女子大学『幼児の教育』編集委員会
2021 Printed in Japan 無断転載禁止
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

編集委員／上坂元絵里
菊地知子
久保健太
松島のり子
宮里暁美
お茶大3園合同研究会
（附属幼稚園、
いすみナーサリー、
文京区立お茶大こども園）
編集協力／フレーベル館

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613（営業）●